# 家庭雜誌

## 第六拾四號


幻燈

# 家庭叢書全部拾貳册完成

家庭叢書號外

## 名士と家庭

一部十錢郵稅二錢

紙數百五十餘ページ

古來名士と稱せらるゝもの多し、然れども彼等は家庭に對して如何なる關係を有するか、其父母に對する關係如何、其妻子に對する關係如何、其兄弟親族に對する關係如何、吾人は此書を(一)名士と家庭(二)ナポレオンとジヨセフヒン(三)ビーコンスフヒールドと其の妻(四)愛國家ガリベルヂーの妻(五)詩人ミルトン夫妻(六)勇士曾我兄弟(七)鐵血政略家の家庭(八)勤儉の名士(九)志士吉田松陰(十)化學士バルメンテルの幼時(十一)無冠帝王ユーゴー(十二)經綸の十二章に分ち讀者に吾人が觀察の當れるや否やの判斷を乞ひ且つ此書を以て家庭叢書完成を告げ吾人の事業の結了したるを讀者に深謝する所なり

- 第一卷 家庭の和樂
- 第二卷 夏の家庭
- 第三卷 玩具と遊戲
- 第四卷 家庭教育
- 第五卷 小兒養育
- 第六卷 家庭衞生
- 第七卷 家政整理
- 第八卷 簡易料理
- 第九卷 社交一斑
- 第十卷 婦人と職業
- 號外 家庭と理財

定價各拾錢郵稅各貳錢

發兌元 東京市京橋區日吉町 民友社

塚越芳太郎著

# 近松著作一斑

## 上卷

製本鮮麗 紙數五百頁 定價金三十五錢 郵稅金八錢

## 上卷目錄

●第一、近松の著作◎(一)彼が著作の類別○史戲曲○社會戲曲○史戲曲と社會戲曲◎(二)彼が戲曲の躰○如何に唱歌すべく適當なる躰を有する乎○如何に演劇すべく適當なる躰を有する乎◎(三)彼が戲曲の躰の進歩◎(四)彼が戲曲の想○戲曲の主意○人物の性情◎(五)彼が戲曲の想の開展◎彼が戲曲の効果○彼が戲曲より學び得べき教訓◎彼が戲曲より學び得べき歷史○彼が戲曲より學び得べき文學●第二、彼の史戲曲◎「雪女五枚羽子板」解剖◎「曾我會稽山」解剖◎「國姓爺合戰」解剖◎「關八州繫馬」解剖

今や征戰漸く收まりて文學時代來らんとす世は方に大なる渴望を以て新戲曲を待ちつゝあるもの丶如し新戲曲を待つものは先づ舊戲曲を知らざるべからず舊戲曲を知らんとするものは先づ巢林子の戲曲を知らざるべからず巢林子の戲曲は實に舊日本戲曲の絕頂なれば也巢林子の戲曲は實に日本二千年間に於ける文章の花なれば也

## 各新聞雜誌の批評如左

◎經濟雜誌曰く 此卷には近松の史戲曲を評釋したり停春樓主人の批評眼例に依て深刻なり、

◎東京朝日曰く 曩に「近松門左衛門」を著して世の喝采を博したる塚越芳太郎氏の著にして近松著作の類別より戲曲の躰、戲曲の想、戲曲の効果並に史戲曲の事に至るまでを本卷に擧げたり氏の前著は單に近松が生涯思想等に就て大綱を擧げしに過ぎず本書は之を補ふが爲め其著作一斑を細說せる者にして兩者相俟て始て完全無缺を得る者なり近來文學上の著作多しと雖も本書の如く考察調査の精を究むる者非ず實に文壇必須の著にして近松亦た地下に知己を得たるを謝するならん」

◎大坂朝日曰く 『近松門左衛門』の著者停春樓主人塚越芳太郎氏巢林子が著作に就て前著匱かに單簡なる解題を施こせるに止めたるを此には其細を極め精を盡して研究の手眼を示せり而して尚題して一斑といふもの蓋し謙也今上卷を出す其體裁先づ著作の類別、戲曲の體、其進步、其想、其開展、戲曲の効果等に就て竪說橫說發揮餘蘊なし次に其史戲曲中の雲女、國姓爺、會稽山、繫馬の四稿を解剖し毫を析ち微に入り原作の神氣躍然たり近來巢林子の著作を把りて其解題、批評等を公にせしもの世に其人多し然れども皆片鱗隻甲のみ未だ全體の大に亙りて之を研究せしものあらず著者既に前著に於て巢林子の人を傳し想を敘し今又此大解釋あり下卷の完成を見んと樂しむ意ふに巢林子全集の此盛著に對讀すべきもの未だ之あらず豈一大恨事ならずや著者其れ餘力之を成せ

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

青年叢書第一卷 **武備教育** 定價十二錢 郵税二錢

青年叢書第二卷 **遠征** 定價十二錢 郵税二錢

青年叢書號外 **本朝美術** 定價十二錢 郵税二錢

青年叢書第三卷 **市民** 定價十二錢 郵税二錢

青年叢書第四卷 **職業論** 定價十二錢 郵税二錢

青年叢書第五卷 **技術** 定價十二錢 郵税二錢

社會叢書第一卷 **海の日本人** 定價十錢 郵税二錢

社會叢書第二卷 **簡易生活** 定價十錢 郵税二錢

社會叢書第三卷 **娯樂倶樂部** 定價十錢 郵税二錢

**日清軍記** 前編 定價十五錢 郵税四錢

**日清軍記** 後編 定價十五錢 郵税四錢

**日清軍記** 續編 定價十五錢 郵税四錢

**征清壯烈談** 定價十三錢 郵税二錢

**第二征清壯烈談** 定價十錢 郵税二錢

軍歌 **支那征伐** 定價三錢 郵税二錢

---

德富猪一郎著 **大日本膨脹論** 定價二十錢 郵税二錢

竹越與三郎著 **支那論** 定價二十錢 郵税二錢

**臺灣** 定價二十錢 郵税二錢

通譯官股野保和編纂 **臺灣語集** 定價貳錢 郵税六錢

德富猪一郎著 國民叢書 六版 **人物管見** 定價十五錢 郵税四錢

德富猪一郎著 國民叢書 六版 **青年と教育** 定價十五錢 郵税四錢

德富猪一郎著 國民叢書 十二版 **靜思餘錄** 定價十五錢 郵税四錢

德富猪一郎著 國民叢書 八版 **文學斷片** 定價十五錢 郵税四錢

德富猪一郎著 國民叢書 六版 **天然と人** 定價二十錢 郵税四錢

德富猪一郎著 國民叢書 四版 **第二靜思餘錄** 定價十錢 郵税二錢

發兌元 東京々橋區日吉町 **民友社**

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價　一冊　金五錢　郵稅　金五厘
半年（十二冊）前金五十錢　地方　金五十六錢
一年（廿四冊）同金一圓　共　金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人　金子佐治郎
編輯人　金子佐平
東京市京橋區日吉町四番地
發行所　家庭雜誌社

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　金子佐治郎
編輯人　金子佐平
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿八年十月二十五日發行

# 家庭雜誌第六拾四號

## 目錄



# 家庭雜誌第六拾四號

（明治廿八年十月廿五日發兌）

## 社説

### 狐の嫁入、猿蟹合戰

從來狐の嫁入、猿蟹合戰、桃太郎、鬼島退治などいふ赤本ありて小兒の翫び物とすることとなるが、識者より見れば是れ甚だ大切なることとなり。諺に曰はずや雀百まで躍り忘れず。又曰はずや三才兒の魂百までと幼稚なる國民はかゝる者にて敎育せらるゝなれば、其利害の關係する處、誠に大なる者ありと謂ふべし。

近年來幼稚園といふ者設けられて學齡未滿の小兒を敎育する方法追々整頓し、國學文敎の爲め眞に祝すべきことながら、昔しの人と雖も決して心を赤子の敎訓に用ひざるに非ず。昔しより稚き者の翫弄物として坊間に賣るところの「魚づくし」「蛙が三つで三ひよこ〳〵」、「狐の嫁入」など云ふものは自から幼稚園の爲す所を爲し居りしものなり。

人の考よりも自然は賢しこきものにて許多の年代を經て生じたることには大なる利益あるものなり。たとへば小兒敎育の如きは是非とも小兒の興味に相應したる者を以て其手始めとなさゞるべからず。而していかなる者が小兒の興味に適するかといふことは學者が机上にて考ふるよりは古來此事のみを生活とし、工夫に工夫を加へたる「おもちや屋」の方こそ善く知り居るべき筈なれば小兒の敎育に從事する者は一應「おもちや屋」と相談せられたきことなり。



世には美術家といふものありて美術といへば何か大層

なる製作品に限ることにして、か〻る者ならでは國民の趣好、道德に關係なしと思ふもあれど、其美術熱心の心を小兒の翫弄物に應用して幼き國民の趣好を高尙にすることに力を用ふる人あらば其風致に及ぶところの益は蓋し奈良の大佛を造るよりも大なるものあるべし。こは少しく枝葉に亘りたれど「おもちや屋」のことに關し居れば併せて記るす。

斯の如く「おもちや屋」は小兒の趣好を知り居る者なれば、其店前に並べある赤本は小兒の敎育に志あるもの〻、等閑にすまじきことなり。狐の嫁入などいふ話が柔らかき小兒の心に婚禮の大儀たるを覺へさせ、「狸と兎の話」が善惡に應報あることを敎へ、桃太郎鬼島退治の談が國民冒險の氣象を養ふものなることを思へば、世の父たる人、母たる人誰れか其子の讀むべき赤子に注意するの念を起さゞるを得んや。

小兒敎育法を學ぶべき手近き手本は赤本なり。小兒の心を誘導するは「おもちや屋」の心になりて爲すべし。其益多かるべき也。

牀前看月光　疑是地上霜
擧頭望山月　低頭思故鄕　（李白）

## 史談

### ヲルヅヲルスの詩神

讃美生

ヲルヅヲルスの詩神と云へば、問はずとも其妹嬢ドロセアなるを知る。當時英國文界に在つて、兄弟の名譽を分ち有すべき姉妹ドロセアのヲルヅヲルスのヰリヤムヲルヅヲルスに於ける以外、メリー、ラムのチヤールス、ラムに於ける、カロリン、ハーセルのヰリヤムハーセルに於けるありと雖も、トロセア獨り是等の中に

立ち勝りし最大なる所以は、テルヅチルスの文界の地位の卓絶なるに由ると多きに居るとは云へ、又其の天賜の才性の前者に優りて富贍なりしに據らずんばあらず。

テルヅチルスは、一千七百七十年、カムバーラントに於けるコッカーマス村に、ヂヨン、テルヅチルスの二子として生れ、ドロセアは渠に後るゝ事二十個月にして生れぬ。渠等は幼くして、其父母を喪ひ、自餘の二人の兄弟と、三個の叔父に分ち養はるゝ樣なりしかば、渠等兄妹が其の懷かしき故鄕に於て、費したる月日はいと少かりしかども、その相携へて蝶を追ひ、燕を捕へたりし日の幸なる記憶は、屢テルヅチルスの詩材なりき。

　彼（ドロセア）は之を見て懼れたる樣に見えぬ、
　心に願ど之に近つくとを怖ぢつゝ。

是れ其の一處に燕の巢を尋ねし時の記事なり。

　余は藪から叢に（蝶を）追ひまわれり。されど
　ア、彼は余が其羽を引ちぎらんとを恐れぬ。

是れ共に蝶を追ひたる詩なり。之を以て觀ても知るべし、其の幼なかりける時、故園に於ける渠等兄姉が如何ばかり幸なりしかを。

テルヅチルスは長してカムブリッチ大學に學び、卒業の日は、佛國革命の火、天に沖する日なりしかは、バイロン、コレリッヂ等の青年詩人か、革命の中に吸引せられし如く、渠か血も甚だしく激せられ、遂に身を擧けて其中に投じたり、謂へらく、滔々として歷史を畫く、不義不正、悉く跡を絕ちて、正義、人情、自由、同情、遍く天下に行はれんと、然して其の結末の淺ましく血を骨に變りし時、渠の心の痛苦は如何なりしとするを、渠は人間の墮落の底止する所なきを見て、殆と人間に絕望したり。渠はあはれなる厭世家にして了らんとせり。

渠は年既に二十五を踰へたり、是れ一個の人として世に立つへきの齡なり。然れとも、渠は自からの天職を發見する能はざるが爲め、或は軍人たらんと思ひ、或は代言人たらんかとも思ひ、迷ひて决せざりし時、渠をこの闇黑の中より救ひて、千歳を照す大詩人を作りたるは、即ちドロセア其人なりけり。

彼は自ら一個の詩神なるとを信せり。之と同時に其兄の詩人たるへきとを信せり。若し自個の呼吸を以て、チルヅチルスの笛に吹きこむ時は、如何なる聲を發すへき歟を知れり。彼は暗に渠を詩人に助け長せん目的を以て、嘗て幼なき渠等の如く、兄の手を捉つて、共に生れし自然の懷に誘ひ出し、仰ひて天を見、俯して地を瞰、鳥聲を聞き、水流に臨み、世にありて世のものならざる牧翁牧児と語り、墮落したる世界と墮落したる人外に、別に自然と調和したる人、人と調和したる自然、人と自然と調和したる世界あるとを示して、渠の晦める心眼に、漸くに光を與へ、遂に明かに其己にある天職を認めしめたり。

天命か偶然かチルヅチルスが、其天職を執り初むる同時、渠の一友は、渠か世を益する人なるを信し、死するに臨んて、渠に贈るに數百磅の遺産を以てせり。渠等は是を以て、先つドーセット州なるレイスダウンに小き白屋を得て、此處に筆を執り初めぬ。尋てソマーセット州なる、アルフホックスデンに移り、暫く共に獨逸に遊ひ、歸朝の後、千八百二年エストモアランド州なるグミーアの湖畔に卜居す。湖派詩人の稱是より起る。

渠等の所持金は斯の如く少小なりしかは、其の臺所は非常なる儉約を要す。然も自ら臺所に當るものはドロセヤ嬢なり。彼は貧に甘すると、富に安するか如く、料理、炊事、洗濯、掃除、悉く之を手つからして、少しも恥へき事を思はさりしなり。渠等は小屋の周圍に

菜園を作り、耦ひて耕したり、渠等は纔かにパンと乳にて活きたり『低き活きて高く思ふ』、是れ渠等が示せる模範的生涯なりき。

渠等は歩く時共に歩き、讀む時に共に讀み、書く時亦卓子を共にせり。彼か情に詩滿ちたり。彼は其一毛を私するとなく、盡く、之を兄に供せり。人は彼の餘りに無邪氣なるを見て、彼の詩を作る能はさるかと疑ふ然れとも、彼が著す所の散文、『日記』、若くは『紀行』を讀まは、彼か如何に言語に富贍なりしか、如何に記述に巧なりしを知るべし。

朝の五時と六時の間に倫敦を出で立てにき。美しき朝なりき。聖ポールの市の小舟輳まる川を以て、ユストミンスター橋上より、如何に美なる眺望なりしそ。煙の雲に曇らぬ家屋、終なく立ち續きて、朝日眩ゆくさしかゝり、其の淸き光は、自然自から其淸觀を示すものゝ如くなりき。

七月三十一日朝の四時に、カレイに着しぬ。夕に海岸を歩き、海の上を見渡せば、西方遙かに雲の如き故國の海岸、夕の明星、空の榮光を見る、水上の反影は、空より更に美しく、その紫色の波は寶石よりも燦きたり。

是れ、彼の紀行にものせる、ユストミンスター橋上、及び、カレイ海岸の景色なり。是をヲルヅヲルスの有名なる『地は、示すべく是より美なる光景を有す』、及び『夕の明星西天の光華』の二個の初句を以て起りたる、二個の絕句に對照するに、彼は殆どその散文を以て、ヲルヅヲルスが韻文を以て、造詣せし處に造詣せり。『彼の紀行はヲルヅヲルスの散文にて、ヲルヅヲルスの韻文はドロセアの詩なり』と。是れヲルヅヲシヤン社會の通語なり。彼が自から詩を書かざる、是れヲルヅヲルスは如何に文界に大なるかの一理由にてあるなり。

千八百二一年チルヅチルスは、メリーハッチンソンを娶れり。是れドロセアとは豫て相知れる中なりしかばチルヅチルスの家庭は、之が爲に一層の快樂を副へ、兄の爲に身を獻して、嘗て爰に於て嫉妬を知らざるドロセアは、滿腹の同情を以てチルヅチルス夫妻の幸福を祈り、やがて兒女は多く生れ、彼に第二の母の如くに懷きけるにぞ、詩人の家庭は、宛から合奏したる音樂なりけり。

ドロセアは婦人に似合はぬ丈夫なる躰格を有したりしかば、人々は其健康の爲に憂ふるにも拘らず、チルヅチルスに隨ひて山間深林を跋渉したり。チルヅチルスは、啻に彼を詩神として嘉したるのみならす、又疲れさる伴侶として嘉せしなり。渠は其詩の或る行に、彼を『牧兒の如く健なり』と記せり。然れども壯時過勞の結果は、其晩年に於て、重き打撃を彼に加へぬ。千八百三十二年、チルヅチルスは六十二歲老いたる時、彼は危險なる熱病に捕へられ、辛うして恢復せしかど、心神復た平生にあらす。是より漸く齡と共に衰弱して、一千八百五十年、チルヅチルスの死に後るゝこと二年にして逝きぬ。

彼が生涯を回顧するに、彼は寔に淸く高く、缺點少なく、世女の中に最も天使に近き婦人なりしなり。

## 科學

### 小兒の世界

嵯峨のや主人

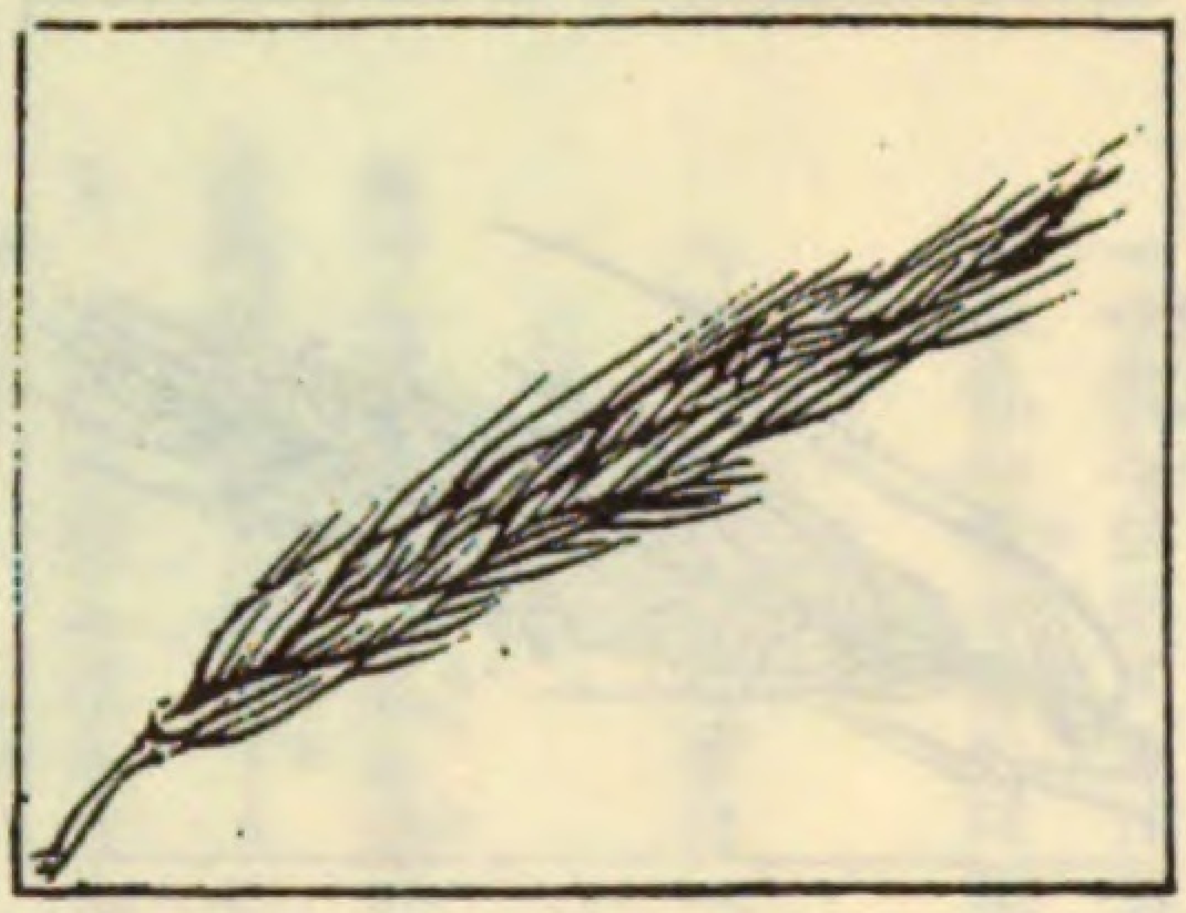
裸麥、大麥、小麥、及び米、

何でも利益のあるものは、皆見た所がザッとして居ます、あの裸麥なぞを御覽なさい、あれを奇麗な薔薇の花だの、美しい欝金香なぞに比較べる、と實につまらないものでは有ません歟！　然し薔薇だの欝金香なぞ

は無ても、人は食ふには困りません、然し裸麥がないと、隨分所に據ては困ります。

其に一寸見てつまらないものと思ッたものでも、よく〳〵見て居る、と總ての物自づから新しい趣味の生ずるもので、裸麥なぞも左樣です、よく見ると其中には、中々澤山他の植物にない所の面白味があります。

試に裸麥の莖を地から引拔て御覽なさい、其細き根には充溢總の樣なものが下ッて居ますから、而して時に據ると其總から三四本の莖が出て居る事があります。殊に冬期の裸麥は、永く雪の下に在て、根を地に張る事深ければ、總の樣なもじや〳〵も澤山あります、又裸麥の莖は如何樣もの歟といふに、細長くして所々に節があり、而して節の間は管になッて居ます。



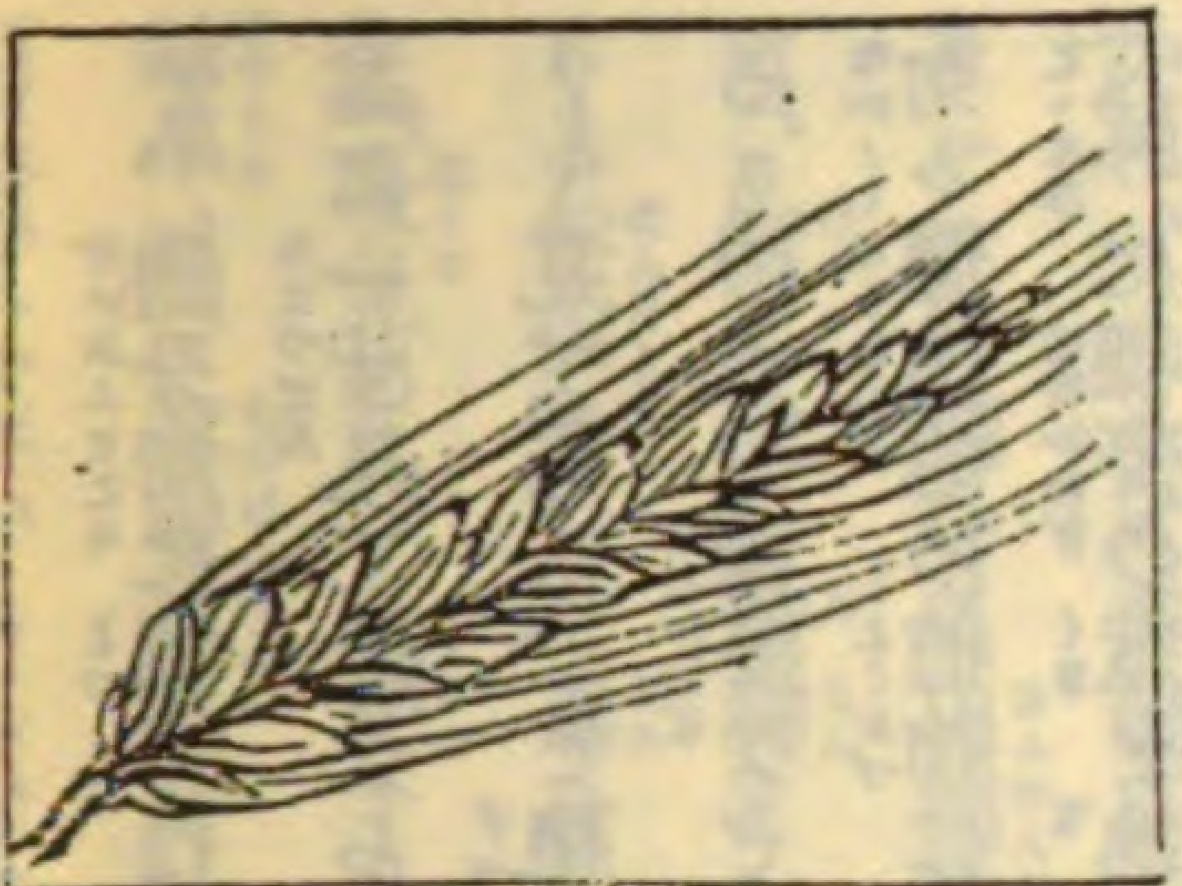
裸麥の葉は何處にある歟といふ、と穗がみのッた時は、葉は落て仕舞て在りませんが、然まだ穗の出ない春の頃には、美しいやさしき葉が澤山有ます、裸麥の葉は節の所から出て、始の中は殆んど莖を蓋ふて居ます、此葉は木の葉の樣に、節が横に向て附て居るのではなく、葉の長さに從て縱に附て居ます。此葉は其一ばん下の所で莖を包み、上の方は延たまゝ風に吹れて、滋養分の要素を吸て居ます。而して此葉も根も充分に生長の要素を吸て、穗が出で、花が咲き、粒が登ると、葉は次第に落て、僅節の所に殘て居る計になります、だが裸麥に花が咲か知らぬ？と諸君は御疑になるでせう。咲ますども、咲のは慥に咲ます、然し唯木の花の樣な美しいものでないのです、其故諸君が氣の着ないのも道理です。

試みに春の末野に往て御覽なさい、裸麥の穗には、青やかに光るむく毛の樣なものが着て居ますから、若之

を顯微鏡で見たならば、諸君は佶度成程之は雄蘂で有た歟と御信じになります。此雄蘂は麥の穗を成立つて居る小さな花から抜け出た、豐の粉で充された袋を持て居ます、而して花の底に女蘂が隱れて居て、雄蘂の粉が其中に落ちると實を結ぶのであります。



小麥、大麥、米の類も、皆裸麥と一ッ種類であります。



夏試に野に往て御覽なさい、諸君は此方彼方の岡に穀物の穗の波立て居るのを御覽でせう、此處には裸麥の穗が黄になッて居れば、彼處には大麥が充滿實を結んで重々と頭を垂て居り、其向ふには若い燕麥が青々として居ます



今靜に小徑を踏んで傍へ倚て御覽なさい、彼等は其莖に於ても、其細長い葉に於ても、其根に於ても、其穗に於ても、皆各よく似て居ますから、唯異なる所は、大麥には穗に鬚があり、燕麥には穗の代りに箒が在る丈です。



米は一般に田へ作ります、彼は温き氣候と濕りたる土地とを愛します故、若し之を畑へ作る時は、水をよくやらねばなりません、植ゆるには並べて植、又常に雜草をよく苅拂てやらなければなりません、此の種の穀物

の中、米が最も手がかゝります、然し其收穫は又莫大のもので、我國の樣な米食住民は、實に此米の爲めに養はれて居るのです。古は五月を以て田植の時代として有ました、されば早苗とる山田の筧もりにけり引しめ細に露ぞにぼるゝなどの歌さへあります。

○牛乳の飲方　牛乳を飲用する者は大概食事の前に飲用すれども其は大なる誤りなり牛乳飲用者は宜しく左の三箇條の注意を怠るべからず

一牛乳を飲用するは食後三十分乃至一時間の後たるべし

一牛乳を煮る際には絕えず攪交ぜて乳の表面に薄皮を出さぬやうなすべし

一男の强からぬ者は一時に一合の乳を用ふるよりは五勺づゝ二度に用ふべし

何故食事の後に乳を飲むべきかと云へば元來胃の働きは肉の如き動物性の物を消化するにありて米飯の如き植物性のものは消化せす、米飯の類を消化するは唾液と腸との働きなり食後三十分間位を經過せしときは胃が漸く胃液の分泌を盛んにし飯の消化を止むる時にして其際牛乳を持行けば胃液は益々盛になりて能く之を消化すべし然るに之に反して牛乳を先に飲み後にて飯を食へば飯は胃液の盛に起る所へ投ぜられて消化を妨げられ牛乳消化の力も亦た滯めらるゝに至るなり牛乳を飲む人が晝頃までも消化せぬやうにて腹がブタ／＼すると訴ふるは前記の結果に外ならず、但し胃の極めて强壯の人にありては必ずしも食後になさゞるも宜し又食後には到底用ひ難しとならば食前二時間半以上の時に飲めば是亦妨げなし、牛乳を煮るは肺病などの黴菌の輸入を豫防するの注意に外ならざるが煮るとき乳の表面に薄皮を生ずるより滓の如く思ふて之を捨る人あれど其は滋養分を捨つるなり因て煮るときは箸又は匙にて絕えず攪交ぜ火上より卸したる後も成るべく攪交ぜて薄皮を出さぬを肝要なり、胃が乳を消化する力は小兒ほど强く年老れば老るほど其消化力を弱くするものなり小兒には一時に一合の乳を與ふるもよけれど大人には却て宜しからず成るべく一度の分量を少く一合の乳なれば之を五勺づゝ二度に用ふるやうになすべしと

# 文藝

## 郊外漫步

嵯峨のや主人

十月某日郊外漫步を試みばやと思ひて家を出づる。元

より漫歩の事なれば、さしてゆくべき所もなし唯爪先を前にして踵を後にしてゆく、

先づ上野の公園に到れば、清水堂の邊なる櫻の大樹も、彌生の頃には引替て、木の葉は散失せて一片もなく、細々たる梢の枝、宛然蜘蛛の網の如くかゝる。

土曜日の事とて都人の三々伍々手を携へて遊べる者多し。

我は東照公の御廟前を右に折れて美術學校の前に出づる、二列を組る一群の兒童と女兒の、天王寺の方へまがりゆくを見ぬ、我も其後を追ふて曲りゆき、音樂學校の裏手にて追附く。

彼等は近き邊の小學兒童なるべし、洋服を着たる一人の教師、其前頭に立ちて彼等を導けり、一群は兒童の十四五人、と女兒の十四五人より成れりき、一先に立ちて進める教師の後領に、元より目のあるべき理なければ、兒童が何をなせりと知らざるべし、暫時もじッとしては居らぬが兒童の性とて、おとなしく列を立て進むは彼等の好まぬ所なるべし、彼等は退屈なるまゝに、或は列を離れて石を拾ひ擧げ、其を我前列の兒童に打投るもありき、打投られしとふり向てやツきとなり、足を擧て蹴る眞似をするもありき、或は隣の子のちり毛を一寸引張て、殊更に知らぬ貌してわき向くもありき、或は何事を歟指し笑ひ、或は何事を歟呟き合ひ、或は唇を返して嘲り合ひ、或は白い眼を見せて睨み合ひ、或は手を擧て叩き合ふなど、列は屢亂るめり、然も教師の小言は彼等の念頭を去らざるにやあらん、彼等は折々元の列へ戻りて、自ら其隊形を保てりき、



女兒は男兒よりおとなしければ、爭をする者は少けれ

ど、列を保てるは却ッて男兒よりは少かりき、或者は鈍栗を拾はんが爲めに、或者は梢の烏を眺めんが爲めに、或者は名も知れぬ草の花を摘んが爲めに、多くは列を離れて、隊より後るゝ七八間に及びき、

一群天王寺の墓地を過て、根岸の方へ向ひしが、鐵道の踏切へ來りし時、一聲の滊笛林頭を搖りて、滊車鶯谷の方より來る、兒童等は之を見るより喝采しぬ、二列運動の單調なる遊びに飽る兒童の心には、滊車の雷聲疾走は大なる變化なりき、彼等は喜びの餘り、或は双手を擧て叫びき、或ひは大地を強く蹈つゝ踴躍りき、

女兒も流石に拍手喝采はせざれど、喜びの情は面に溢つゝ、走來る滊車を見返り見送りき、斯て滊車踏切を走過るや、彼等は右の方なる小徑を根岸の方へ向ひ去りぬ、

我は小學兒童を見送りて根岸へ出でぬ、小やかなる音無川の流に添ひて、澤野と云へる團子屋の前を過ゆけば、小やかなる橫徑あるめり、我は此小徑を入りて三河島村へ向ふ、

古たる荒寺の卵塔塲を右に、紫苑の花の今を盛りと咲ける圃に左に見てゆけば、田中の小徑へ出ぬ。四顧すれば滿天の秋色は稻田に落て、滿目蕭條自ら人の心をして傷ましむ、

## 二人の孤兒

苦仙子譯

余か郊路を出でゝ村巷に入りしころは、西山に傾く夕日影、殘の光を向側にたてる古寺の風信旗の上に射て、金色の光まばゆく輝いて此の村に一層の風光を添へたり、余は道を横さまに向側へと足に任せて歩みゆき、石階三つ四ついくつか蹈み上りて、やがて寺の後なる墓地に出でしが、其處に永眠せる人々を思ふにつけて

も、うつせみの我身をはかなみ、そゞろに哀を催ふして暫時其處なる墓石に腰うちかけたり、うち見やればさまざま低き墓表は數知れず並び居る、其下には浮世の塵にそみ、活業の苦に追はれて、心ならずも此處に永き休憩所を求めたる人々の今は夢安かに眠れるなるべし、そが中にも價もたけもいや高く、すぐれて大なる石碑は世にありし日に富あり名あり幸多かりし人の名殘を止むる墓表なんめり、



余が腰うちかけし所を距ること遠からずして、蔽ひたる土の尙ほ乾かで、苔まだ蒸さぬ新しき墳土あり、思はざりき墓前には二人の小童ありて、さめ〴〵として泣き居りしが、余の來りしに驚きけん、涙に曇れる眼もて余を見上げたり、二人の間には唯一握の糧餉を置きて、いづれ取りて喫はんともせず、うち守りてのみ居たりけり、さりとて彼等は飢餓にせめられて顏の色青ざめ、四肢瘦せ細りて骨と皮ばかりなる有樣、見るからいたましく、いとゞ哀を增していたく我胸をうつたり、余はしばらく彼等のせんようを見てありしかど遂に耐えず、かく問ひぬ、

何事の悲うて御身等はこの黃昏に、かゝる淋しき處に泣き居るぞや、いとも飢てあるべう見ゆるに、などかく糧餉をうち守りてのみ居るぞや、

と、言ひければ、男の童子膝をたてゝやさしくも一禮して、少し心せきたるまゝに聲調高くかくは答へぬ、

貴女、兒等に二人してものするまでに充分なる糧餉あらず、もし二人して腹に充つるほどならんにはいかでかくうち守りてのみあらんや、メーリーはなどかく偏固に情强くなりしやらん、メーリー御身は今日終日なにものをもものせねば、こはたしかに御身

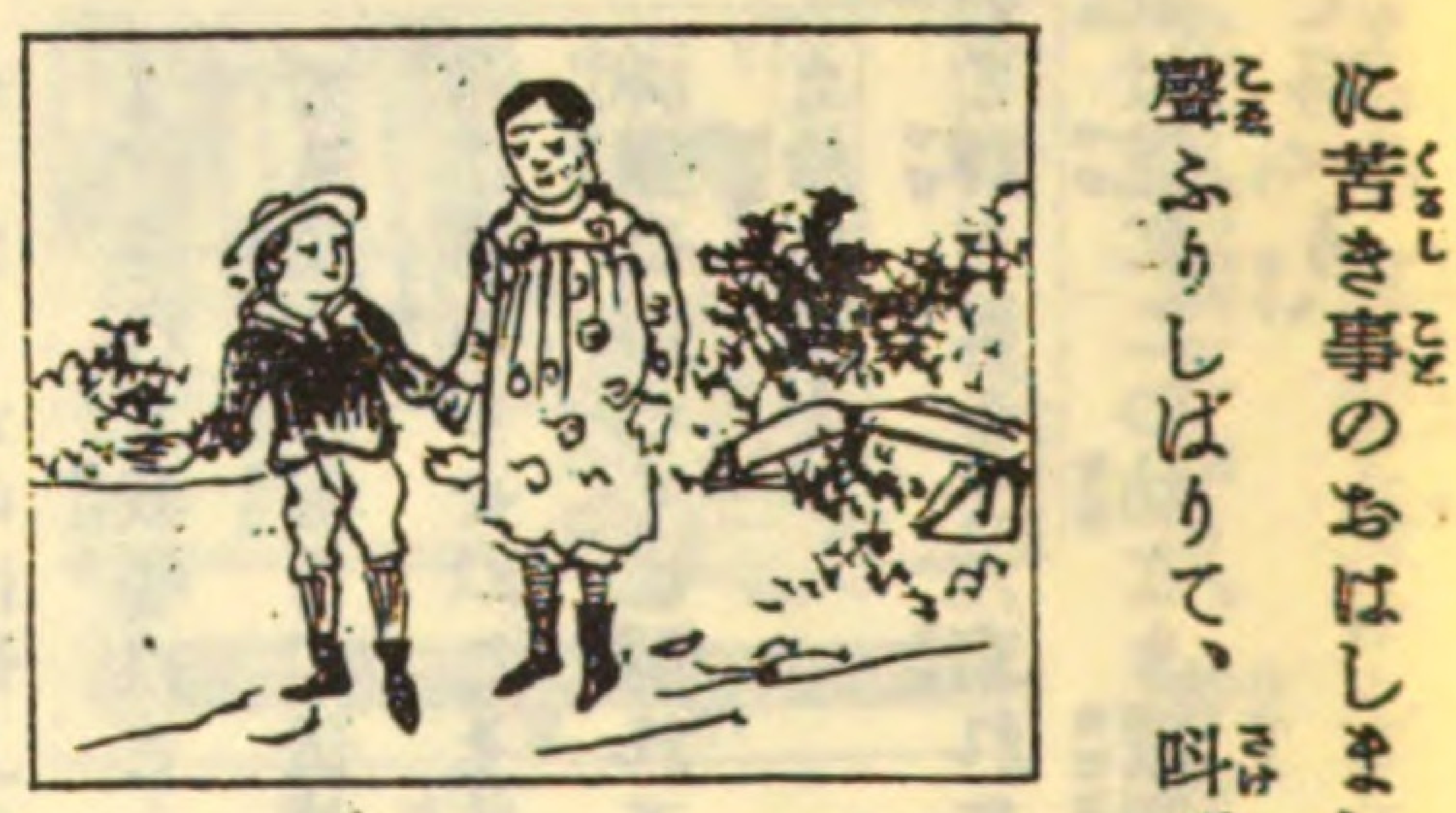
のものなるに、

可憐なるメーリーは遮ぎりて言へり、

否とよヘンリー、御身のものせざるうちは兒のいかでものすべき、兒は昨日すこしなりともそくばくの糧を食ひぬ、されどヘンリー、御身は一昨日より今まで何物をもものし給はねば、こはヘンリー眞に御身のものなりかし、

涕と共に語る二人の訴を聽きて悲しさのあまり、我胸は逼りて、彼等に向ひて問はまほしきこと、また慰めの一言さへも出でずなりぬ、されど男の童兒はさも我意中を推せし如く、いと直ぐに彼等の身の上を語り出でぬ、

我等同胞が幼遊に餘念なくなほ物心つかぬをりに、我等の父なる人は惡しき人々に唆かされて遠き海へと往き給ひしかば、我等は母なる人と共に彼處に見ゆる大なる槲樹の下に住ひぬ、しかるに母樣は如何



に苦き事のおはしましけん、一日いといたう悲しき聲ふりしばりて、叫び給ひしが、見るがうちに顔の色さへ恐ろしきまでに變りはて給ひしかば、二人は驚き泣き出しに、母樣は我等に向ひてかく語り給ひぬ、我身ははやあの世にゆかんほどに同胞二人なかよく互にいつくしみて相助けよと、のたまひて、また言辭をつぎ、此度の戰終りなば父上は歸り來給まはめ、若し父上のまた歸り給はずば、神樣こそ御身等の父ならめ、と言ひて二人を抱き、接吻して遂に息絶えたまひぬ、さて村の人々あはれがりて此墓に母なる人を埋めしかば、久しき間二人は此處に來りて母なる人の還り來まさぬことを嘆き悲しめり、されど父なる人もいまだに歸り來まさねば、吾はし

が思ひぬ、もし我等同胞して海といふものゝある所に往かば必ず父なる人に遇ひまつりて、また昔年のごとく幸福なることを得んと、されば同胞二人手に手をとりて、幾里とも知らぬ長程を昨日今日と久しき月日重ねてたどり往きぬ、かくて道すがらゆきあふ人々いと哀れがりてといきつきて見送るもあり、笑顔して我等を迎ふるもあり、我等の貯蓄つきしときにはいと懇に我等を惠みくれしよき人もありけり、

とかくして海といふ所にたどり着きたり、至りて見れば、海とは我等の脚下に見渡すかぎりひろ〳〵と何處を際涯とは知らぬまでにひろがりて、いともいとも大なる大河の流れなりしかば、父なる人は必ず此水に溺れ沈み給ひしならんと思はれて、父上、父上と、泣き叫びて我等も共に死なましと願へり、

かくて我等同胞は泣く泣く母なる人の墓へ歸り來りぬ、此糧をめぐみくれしグーデーと云ふ老女は父なる人は海を渡りて失せ給ひぬれば、もはや歸り給はじと告げしかば、我等は父なる人も母なる人も共に失ひし身なれば、これよりは母上の敎え給ひし神樣をゆきて尋ねんと思ふなり、貴女、御身は我等の父なる神樣は何處にましますか敎えたまひてんや、母上はのたまひぬ、眞の神樣は天にましますと、またグーデーどのは母上もかしこにいますと、いはれたり、されど我等はこゝかしこさまよひ、尋ね求むれども眞の神樣も、母樣も何處にもましまさぬにや、遇ひまゐらせぬこそ悲しけれ、貴女、天とは何處、神樣はいづくに隱れておはするぞや、やよ貴女、敎え給ひてよ、

いと詳らにもまた哀れに譚しぬ、

我は遂にこの幼なき譫語を語る二人を左右に抱きしめて叫べり、

可愛のものや、不憫のものや、いざ來ね、二人ともに我身と共に住みてんや、余は御身二人をはごくみ成長せしめてん、御身等が母なる人のもとにゆき、吾等同胞の父なる神の膝下に召さる丶までは、我を二度の母と思ひて、やよ、心安かれ二人の孤兒、

右は『オルフハン、チルドルン』と題する英詩を譯したるものながら譯者詩筆に乏しければ散文にものしぬ、書き終りてこれを見れば情味全く索然たり、唯幼きもの丶ためにかくはしるしつ

## 禪學の修行

湘川漁夫

一人の名僧巧に空を談じ、眞を論じ、禪智識の名、恰く遠近にきこえわたりけるが、此頃盛んに行はる丶、實意なき虚飾の風俗に、倦み疲れたる人の多きにや、軍人官吏學者を始として書生は愚か、若き婦人に至るまで、其敎を受けんとて、常に集り來り、其のありがたき功德に由り、昔の人の爲せる如き、迂遠なる難行苦行の法を用ゐずして悟の道は容易く會得せらる丶に至りたるは、誠に人生の幸福なれば、道の進歩は殊に著しく、僅かに數月を出でざるに、はや世間一般の歸依を得んとするに及べり。



爰に又同じく世の浮薄を厭ひ、飢へ渴くが如く、安心立命の道を求むる、一人の青年ありけるが、大和尚の高名を傳へ聞き、態々遠方より尋ね來り、日頃の望を果たすは、此處を措いて他にはあらじと、直樣其門に入りて、禪學の研究、悟道の修練に怠なかりしが、直ちに師に就きて學ぶは、雜誌講義錄の類に由るよりは遙かに捷路ならんと思の外、中々に他人の如く利發の

性にあらざるが故か、月を累ね、年を積みても、己が迷を霽らすこと能はざるのみならず、常に空漠たる雲霧の如き物を以て、心の食物と爲し居るが故か、理性德性靈性をも養ふこと能はず、或る時は終日窓に對つて無言にて坐すれど、己が心に材料乏しければ、空を悟らんとして、却て愈ゝ空想に耽けるのみにて、一も得る所なく、偶ゝ師につき親しく敎を乞へば、謎又は手品師の讖に類する問題を、示さるゝにあらざれば、解し難き經文の句を外より敲き込まれ、餘りに執心に問を試むれば、無慙や、一喝苛責の杖を喰はさるゝとありて如何にも本意を得ざること多かりしが、多年の修行の後、遂に大に悟り得たる所ありて、青年はいへらく「かゝる捉へ難き敎の世に流行し、俗人の爭ひて之に歸依するは、是れ空の空なる所以にして、和尚の世に媚びて、釋尊の道を安賣すれど、人生の大問題を解くこと能はざるは、是れ彼が心中、本來無一物なればなり」と。空を說く者亦空なり。

## 犬の敎育

或人犬を飼ひ、其の小さき頃より、獵を習はせ、鬪を仕込みしに、生長するに隨ひ、技藝熟練し、近村の地には、及ぶ者なき程に至りければ、此上なき者の如くに愛し居りけるに、犬もまた主人の意を察し、事々に能く命を奉じ、其の忠實なること、他には稀に見る所なりき。

此犬如何なる事に感じけん、門前を行き過ぐる人々に向つて吠え始め、其所行次第に强り、常に甚だ喧囂なるのみならず、人に嚙みつき、害を與ふること多かりければ、遂に近傍の人々、決議の上、其持主に、嚴しき談判を申し込み、若し要求を容れざるに於ては、立所に撲ち殺さんとまで、意氣込みて逼り來りけり。持主は餘義なく、犬を捉へて鏈にて縛り、人々の眼前にて打ち懲らして謝しければ、犬は其の何の意なるを

知るに苦しみ、恨めし氣に、主人の顔を打ち守り、呵責の理由を問ひけるに、主人は其の他人に對する無禮を戒めければ、犬は尙も訴へて言ひけるは「是れ君の平生敎へ給ひし、愛國尙武の主義を、實行せしに過ぎざるのみ」と。

偏狹なる敎育は子弟を過る

## 犬と餌

數多の野犬、群をなして、里に集り、往來の人に、甚く妨害を與へければ、近村の人々、皆用心怠らず、止むを得ず、棒を振り、刀を拔き、短銃を放ちて、逐ひ拂はんとすれば、犬は却て益々吼え騷ぎて爲べき樣なく、手に餘して、警察の取締を乞ひけるが、警察にても始の程は樣々の法を試みたれど、皆効なく、是れも持て餘して、果は只其の爲すが儘に打ち任せ置きけり。

時に何處よりか來りけん、一人の旅人、別に恐るゝ樣子もなく靜々と、里の方へ步み行きければ、其地の有樣を知れる者共、走り寄りて、危險を說き、不注意の廉を戒めけるに、旅人は其の諫を心にも懸くる樣子なく惡犬の簇り居る中に、事ともせずして步み入りけり。

他の人々は、今にも彼人の嚙み殺さるゝならんとて、危むと限りなく、遙かに岡の上より見送れば、不思議にも、犬は左程吠えもせず、却て仲間の中にて、互に嚙み合ふもあり、尾を掉りて旅人の後に附き隨ふもあり、是れはと驚き眺め居る中、彼人は要事を濟しゝと見え、無難にて歸り來りければ、皆心中に不審を抱き、其周圍に集りて、惡犬の氣を和ぐる秘訣を問ひしに、旅人は笑を含み、懷の中に隱し持ちたる、數個の餅を出だして見せ示しけり。

惡言惡口も餌のために靜まる。

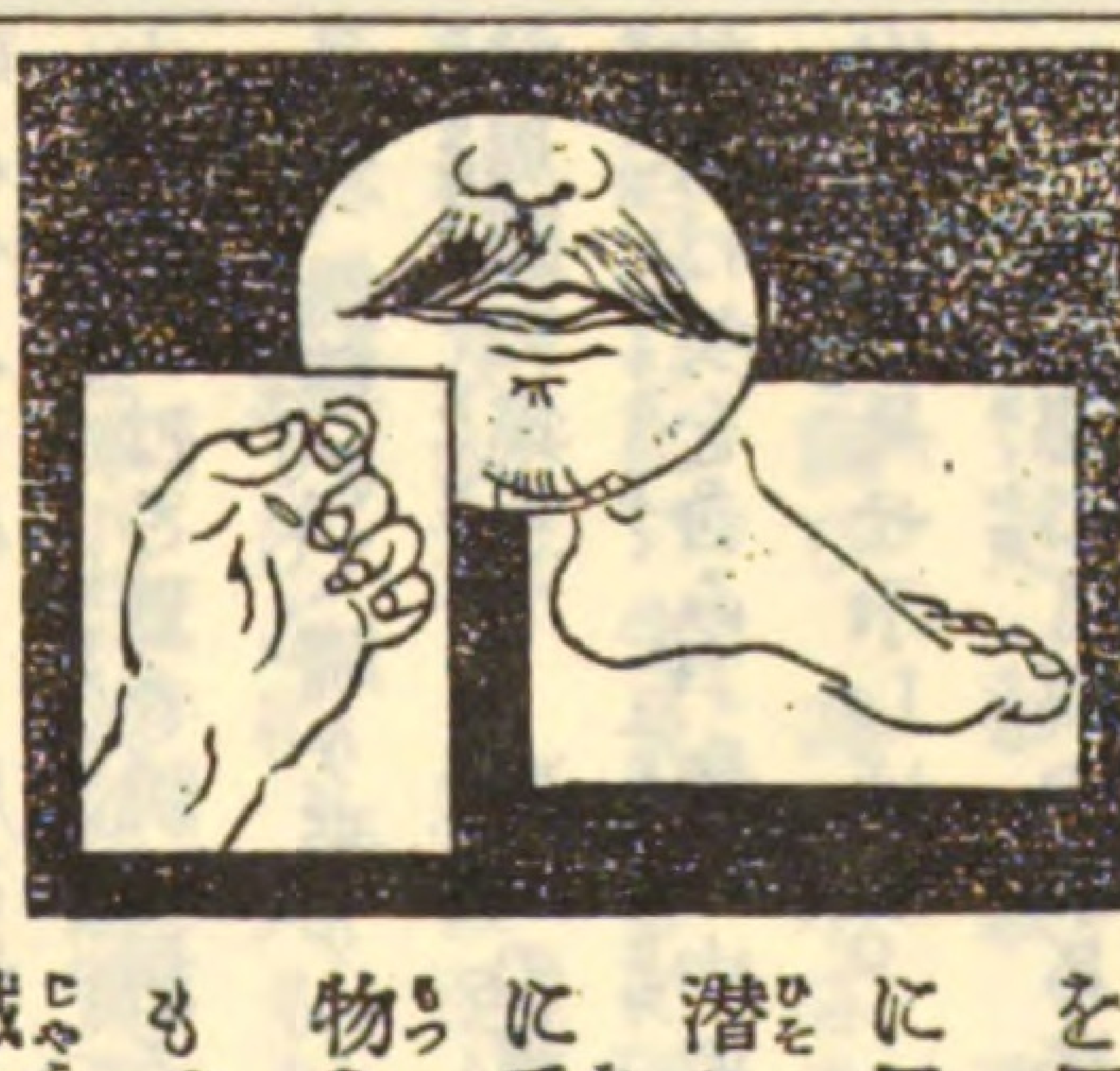
## 朝顔の花

朝な朝なに咲きかへて、盛り久しき朝顔の、今日の姿や、昨日の姿に勝るらん、日毎に替はる其の麗はしき花の色に、秋の夜の長き眠も、忽ち覺むるが如き心地せられ、志ばしみとれて佇み居りしが餘りの鮮かさに心を動かされ、朝顔に對ひ「何故に斯く日々朝まだきより起きて、人の心を慰めんとは務むるぞ」と、問ひけるに、朝顔はいたく恥ぢらひたる面持にて、朝霧の中に半顔を隱し、最と低き調子にて「さる事は問ひ給ふな、我が形を粧ふは、たゞ破垣の骨を隱さんがためなり」と、口隱りて答へけり。

外形の美を以て內心の醜を掩ふ者多し

## 口　と　手　足

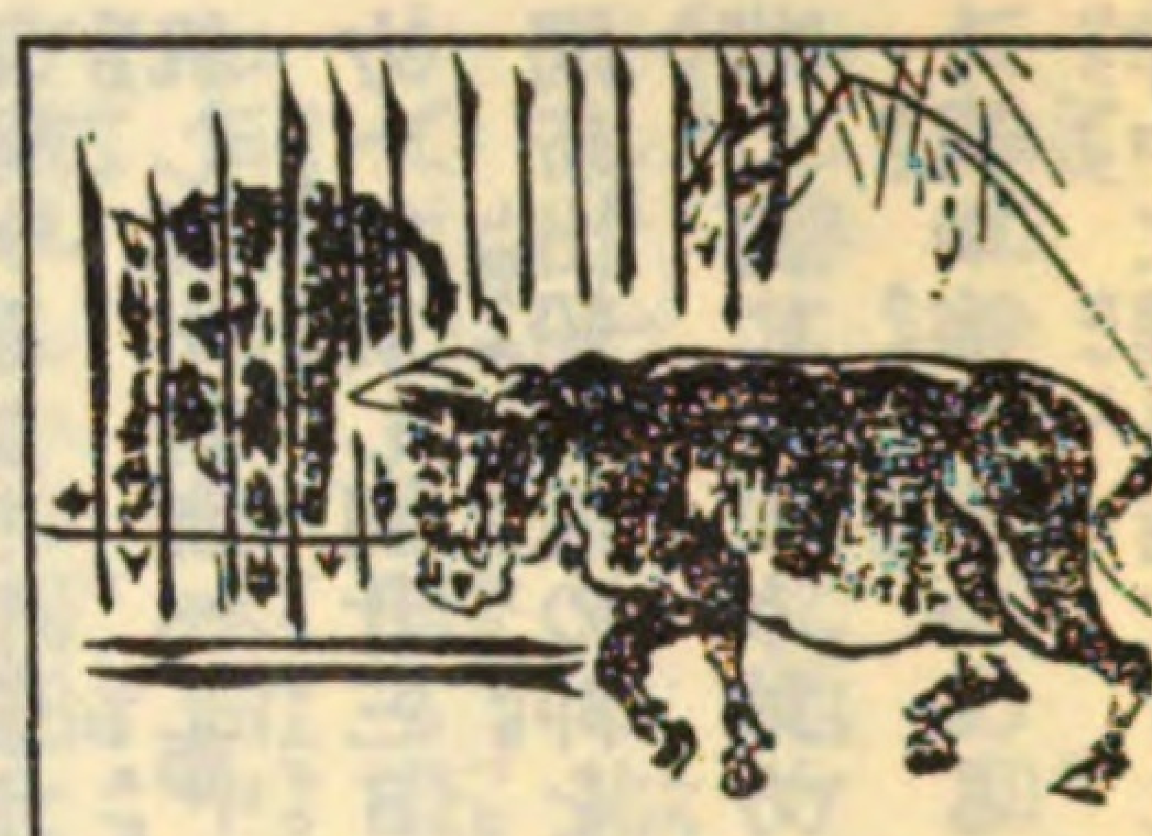
口自ら腦の代理者なりと稱して、權を貪り、他を罵り、己が非を飾り、常に大平楽を吐き、世界の奥義は總べて辨へ知るが如く、哲學者口調の法螺を吹き、手足には嚴しき命令を下し、權柄にて猶豫なく使役し、壓制を極めければ、手足は心惡き事に思ひ、懲らしめくれんとて、潜かに策を案じ出だし、下知に乖きて、糧道を斷ち切り、食物を運ばざりしかば、流石の口も、忽ち干上がりて、一日の籠城もなり難く、傲慢の言も、奸佞の辯も、用ゐるに處なく、遂に降參して、憐を乞ふに至りけり。



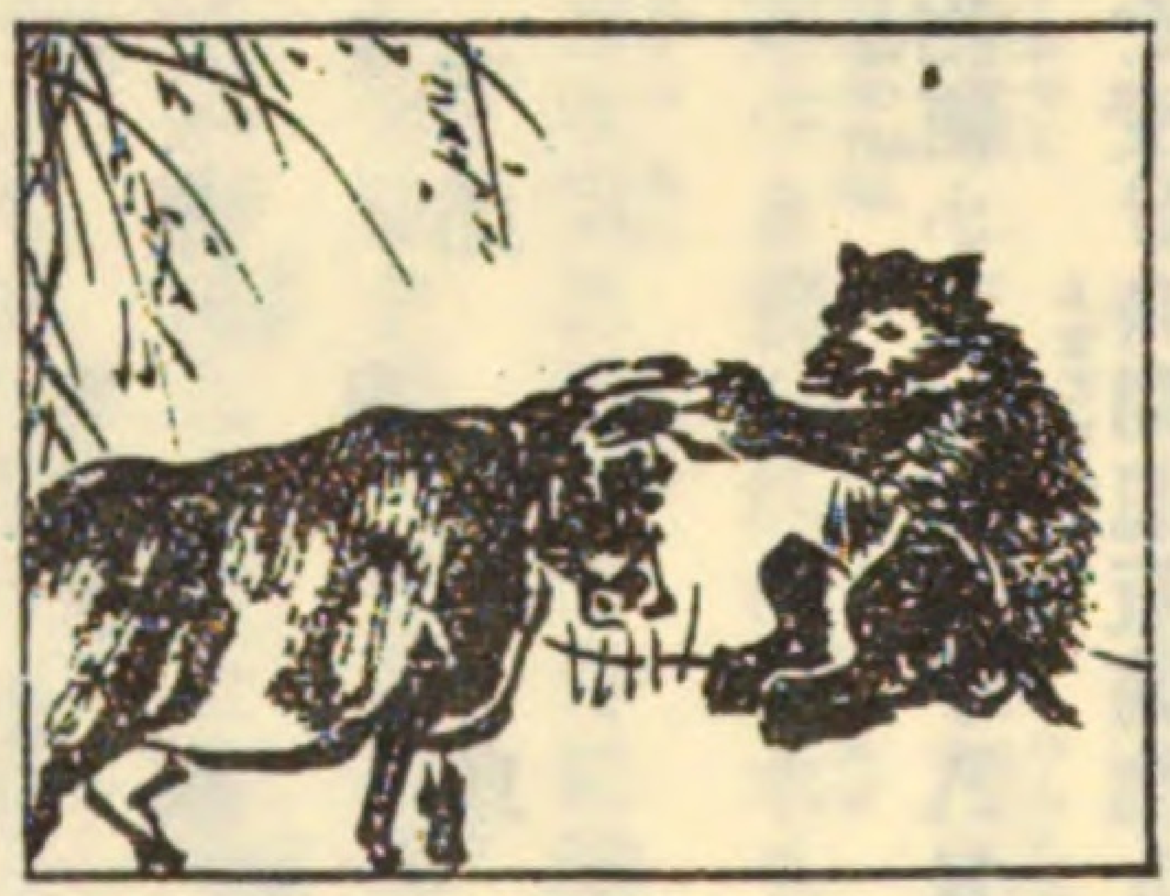
口の眞の價値は食物を斷たれて後に知らる

## 熊　さ　牛

熊「くらやみに立ち居るは何奴だ返事をせよ。
牛「この盜賊熊め、垣を破つて來たな。
熊「其聲は遲鈍間野郎だな、其處退くな、一摑にしてくれう。



牛「何を小癪な近寄り、我が力量に膽を潰すな。
熊「よしきた。牛「サーこい。熊「ヤー。
牛「モー。
バタバタバタドタドタドタドタ。
熊「此爪を放させろものか、己れは引きが得手だ。
牛「此角を弛させろものか、己れは突きが得手だ。
熊「弱い奴だ、何處まで引かれるのだ、モー一里もひさつた。
牛「弱い奴だ、何處まで推されるのだ、モー一里もすさるんた。





熊「ドレモー一引、牛「ドレモー一突
バタバタドタドタ。
忽ち川水の音高くドブーン。



# 談叢

## 初太郎の漂流譚

天保の頃初太郎と呼ぶ水夫あり、天保十二年其乘組と共に攝州兵庫を發して奥州南部に赴く中途にして颶風に遇ひ種々の艱難辛苦を經たる漂流譚面白き節もあり且つ古來暖潮の勢に乘りて日本舩が亞米利加の海岸に漂ひたる事實を知らしめんため知己の所持せる寫本より抜き出して二三回の話の種となしぬ

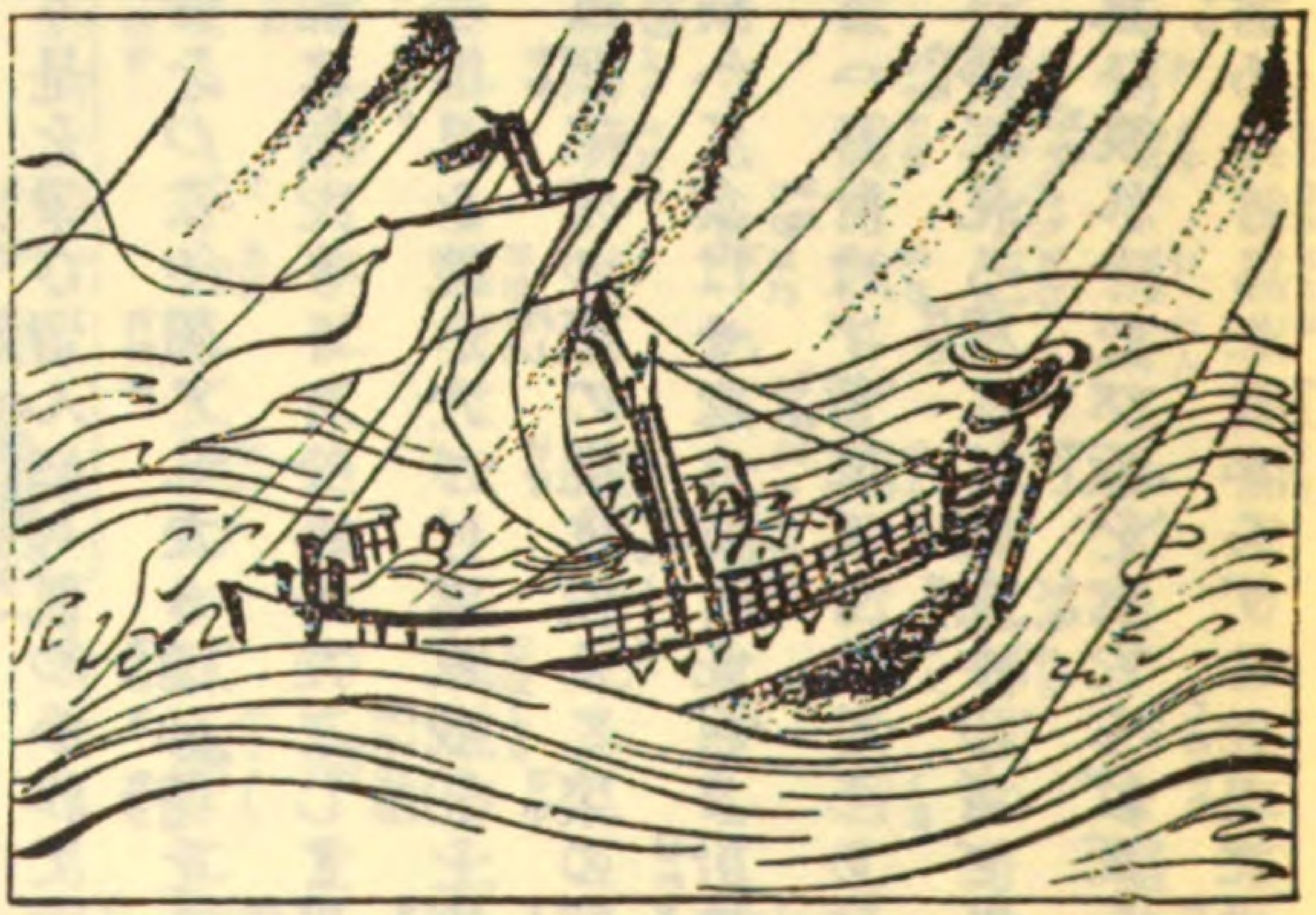
天保十二辛丑の秋八月兵庫西宮内町中村屋伊兵衛船永住丸とて千貳百石積二十八端帆なるに塩砂糖線香菜豆

弁に粮米十五俵を積入乗組の人數には

紀州周作義　沖船頭　善助
阿波　岡廻り　初太郎
初太郎兄　七太郎
伊豫　伊之助
能登　利三郎
伊豆　萬藏
奥州南部　要藏
同　三兵衛
播州明石東乗水　岩兵衛
能登　官次郎
同　惣助
九州　多吉
紀州　彌一郎

以上十三人にて同月廿三日兵庫出帆いたし九月十八日相摸國浦賀の湊へ着き公の御改を受け舟問屋飯塚惣太郎方へ菽豆七十俵水揚いたし翌十九日曉天に浦賀を出帆し奥州南部へ志し乗行しが東風吹出せし故豆州の方へ乗戻し同廿三日に大網代の湊に入船し十月四日に同所出船房總の沖を乗通り十二日夕方下總の國犬棒が岬の河にいたり地方を離るゝこと五六里ばかり此所より奥の海に乗かゝるべきか沖合風宜しからず兎角して洋中に漂ひ居たりしに其夜亥の刻と思しき比より西北の風烈しく吹來り逆浪殊更盛なる故帆を下げて暫しは凌しかど子刻比には最早叶ひがたく成て荷物を少々海中へ投捨翌十三日に至りても風波猶烈しきゆへ又々荷物を捨て十四日の夜迄働きけれどもとかく凌がたく覺ければ各談合してさま〴〵凌ぎ方のことを書て神鬮を取し一同に祈念して是を初しに帆柱を切るべき神鬮に取當り心得たるもの則斧を持て檣の上へ登り是を切る十にして二分ばかりも切込れるに風波の爲に動搖するにより檣忽ち折れて海に入りぬ夫より舳の方へ碇を二挺下け太き苧綱四筋を付て引しめ舟の遠く流るゝを防き又飯料を算ふるに漸く米三俵ばかり殘りたれは其夜より十三人の食料に米一升を粥として食し唯神の助けを祈るより外詮すへき樣なし十九日朝巳刻ばかりにいたり風凪たり各少し力を得たりしに午刻より又辰巳の風にかはり其夜亥の刻に至ります〳〵烈しく吹き

雨も大に降來り翌廿日の曉卯刻より又西北風に變して殊につよく來る卯辰の方へ漂ひ流る尤始て吹拂はれし時より既に地方の山を見るとなく其心痛譬に物なし十一月七八日比まて同し風荒く吹詰たり此時に至りては終に飯料も盡果たり同十日比には舟の外艫破碎し乍立動き海水船中に漏入樣に成ぬ十六日比には舳の方破れしかは端船を解放して是を捨て七挺有し碇も追々に切て二挺殘り六筋有し苧綱も一筋になり三筋ありしつく綱も二筋殘れり又飯料を食盡してより後は積込たる酒砂糖なとを少しつゝ食し雨少き節なれは呑水も乏き故成たけ鹽を食さず故に氣力次第に衰へ十分に働らき得ず一向神佛を祈るの外なし方位を勘へけるに卯辰の方へ九分巳午の方へは一分はかり流るゝやうに覺ゆ冬の間は始終西北の風烈しかりしが既に其年も暮て翌壬寅年の春となりぬたまく風のなく日も有れとも茫々たる大洋の内雲と浪とを見るより外は島に似たるものさへもなく心ぼそきことといふばかりなし海の靜なる時は常に帆を縫ふ針を曲げ鹿の角或は松の木の節などにて餌に似たる形を作り鰤、九萬疋の類を釣てこれを食す潮の色は或は黒くあるひは青くな



るのみにて外に替りしともなく鳥は唯信天翁を見るのみなり各心に思ふ樣は日本の内にても東の端れにて吹拂はれ夫より卯辰の方へ專らに流れし事なれば所詮日本に近きとは思ひもよらずされども三月の節に至り海靜にならば鰹を多く釣貯へて食料とし東南の風を待て兎も角もして帆を作り西北の方へ走るならば運に叶

ひ日本の地へ近付ともあらんか神明の加護にや此程の艱苦を受しかど一人も病氣死亡の者なく加之折〻雨ふりて渇を助け大魚をも時〻は得て之を食し又船の包板に「せい」とゝふ貝の多くつきたるを取などして飢を助かり命を繋も偏に歸るべき志るしにやあらむと互に心を勵し居たりける凡海上に漂ひ流るゝ事百二十日餘り數は幾千里といふ事を知らず斯て二月中旬に至り至極暖和の日になりて或時やぐらの上に登りて四方を眺め居たるにはからずも西の方に當りて遙に一艘の船を見懸たりかゝる洋中にて見ゆる船は外國の船なるにや又は薩摩より琉球にかよふ船なるにやなど評し居る内次第に近つき帆數の多きを見て扨こそ黑船なれと思ひ一同に怖畏して船中に集り居たりし内其船漸〻と近寄來り暫しは其あたりに回馬闖居たりしが遂に橋舟を二艘おろし一艘ごとに阿蘭陀の樣なる人五六人乗り三十目計の鐵炮六挺づゝ積で再三我舟のあたりをめぐり試みやがてこなたに乗移りたりいかなる亂暴に逢ならんと恐ろしけれど何をいはんも言語通ぜざれば只一同は掌を合せ拜居たり彼等もこなたの飢渇に弱りたるを察したる躰にて彼本船を指さしあなたへ來らば食事をも與へんと云樣に手合にて敎へ又船中に殘りし酒四十樽砂糖十七樽幷に鍋釜竈迄も橋舟にてかの船へ積取たり是を爭ひ留んにも飢つかれて力なくとはいへ僅かに命をつなぐ賴としたる酒砂糖をさへ奪はれては所詮我船に居たりともせんかたなしと思ひ是非なく皆〻衣類手道具を取かたづけ遂に我船を棄て彼船へ乗移りければ頓て米の飯の握りたると菜の鹽漬とを持來りて各に與へて食はせたり扨も此百日計の間は穀粒を見ることさへも叶はず暫にてもまどろめばいつも飯のことをのみ夢に見る程なれば船中の者ども只朝夕に此事のみを思ひ哀れ一たび飯を食たらば死しても恨あるまじなど言あひけるにはからずも此舟に助けられて一握りの飯

を食ひたる時は其味の旨かりし事たとふるに物なし振かへりて我舟を見れば破れ損じたること目もあてられずよくも今迄はかゝる船に乗りてありしことよ今も砕け沈みなんと見ゆるものを心づよくも風を待て數千里の道を走り再び日本へ歸らんなど、思ひけることよと我ながら淺ましく思はれける扨此助けられたる船は何國の船にや知れざりしが後に聞けば伊西把偏亞の舟なりしよし長さ凡十三間計帆柱貳本彌帆柱三ッ帆數十ヲ計かゝりて橋舟三艘有り船中の形勢大抵蘭船と同じことにも乗組人數廿八人船頭たる者二人は伊西把偏亞の者のよし眼中赤く髮も紅毛人に異ならず其餘の舟子は皆瑪泥爾剌の者のよしにて眼睛は日本人と同様にして髮も黒き色なり偖此舟に乗てより六十日計の間東に向つて飄行しが初め兩三日の程は三度づゝ食事させしかども其後は減じて兩度にし舳と艫にて十三人を二タ組に分ち船中の諸用に使ふ二時ごとに交番して晝夜間斷なし其法甚だ嚴酷なり少しにても怠る時は綱を振廻して呵嘖す無念なれどもすべき様なし十日餘り過てよりは船中水乏しきにや己等ばかり少しづゝ呑て日本人には一滴も飲さず咽かはき身苦しみ疲弱ると漂流せし間よりも甚し其上鹽氣を少しも食せしめざれば後には氣力衰へはてゝ握飯を見ることも否なる位になりたりされども猶責はたりて帆柱の上の働をせよなど命じければ共日本にてさやうの働をしたることはなしとさま〳〵手合して詫しかば漸に許されたり一二間をあ



ゆむにも目くるめきて倒るゝ様なれば舟底などにかくれ忍びて去ばしの息を休めんとすればやがて尋ね來りて太き棒にてつき出し打擲してつかふ斯のごとく苦しめらるゝこと故初め助けられたる時のことは忘れて唯恨め

しくのみ思ひ居たり五十日計になりて皆一同に髪切て海に流しぬ此間船の行こと早き時は一晝夜に百七八十里遲き日とても百里の內外は走りたりと覺ゆ又舟底は銅にて包たる故にや魚など付といふこともなし頓て六十日ばかり乘ゆき四月中旬と思ふ比或日の未刻ばかりに左の方に國の有る所に近付たり則ち碇をいれて地方より三四丁計り沖にかゝれり此所砂濱にて汀より五丁程上は山にして少し高く船人共橋舟にて陸に上り買物などする躰なり陸よりも人來りて船人と何か咄しをする樣子に見ゆ扨其夜の子刻比善助初太郎彌一郎多吉利三郎伊之助惣助七人の者に橋舟に乘上陸すべしとの事なれども夜中といひ殊に案內も知らぬ國のこと故再三いなみければ船人大に憤り善助を打擲などして强て催促なしける故皆々せん方なく橋舟に乘移り濱邊に漕付たる時何れも速に上るべしとて棹をふり上て打べき形勢をなしける故各恐怖して急ぎ陸へ逃上れば橋舟は其儘漕過すと頓て本船の碇を上る聲聞て直に帆をかけて行方知らず成にけり七人の輩濱邊にて茫然として居たりしが初太郎善助申やう今日碇を卸せし時陸の方邊に石壁造りの人家あるを見たりいかにもして其處まで尋ね行き身の上の事を賴むべしと有けれど五人の者のいふには是迄慈悲もなく我々を使ひ苦しめたる舟人の心に引競へ見れば此陸にある人もいかなる邪見の心を持たる者やらん其上けふの晝舟人と陸の者と何やらんひそかに語りひたる樣子なれば惡き巧みをなして我々を此所に捨べき此陸の人に殺させんとの事なるべしいかでかさやうの所にうかつに尋行て漸くに助かりたる命をば又失ふべきや唯此濱邊に夜を明して明日にもなりて土地の樣子物の有さまをも能々伺ひ見たる上にて兎も角もなすべし去にても萬里の波濤に漂ひかゝる遠き外國に來りて衣食の緣にも離れしらぬ濱邊に捨られたれば所詮助かるべき命には非るにやとて

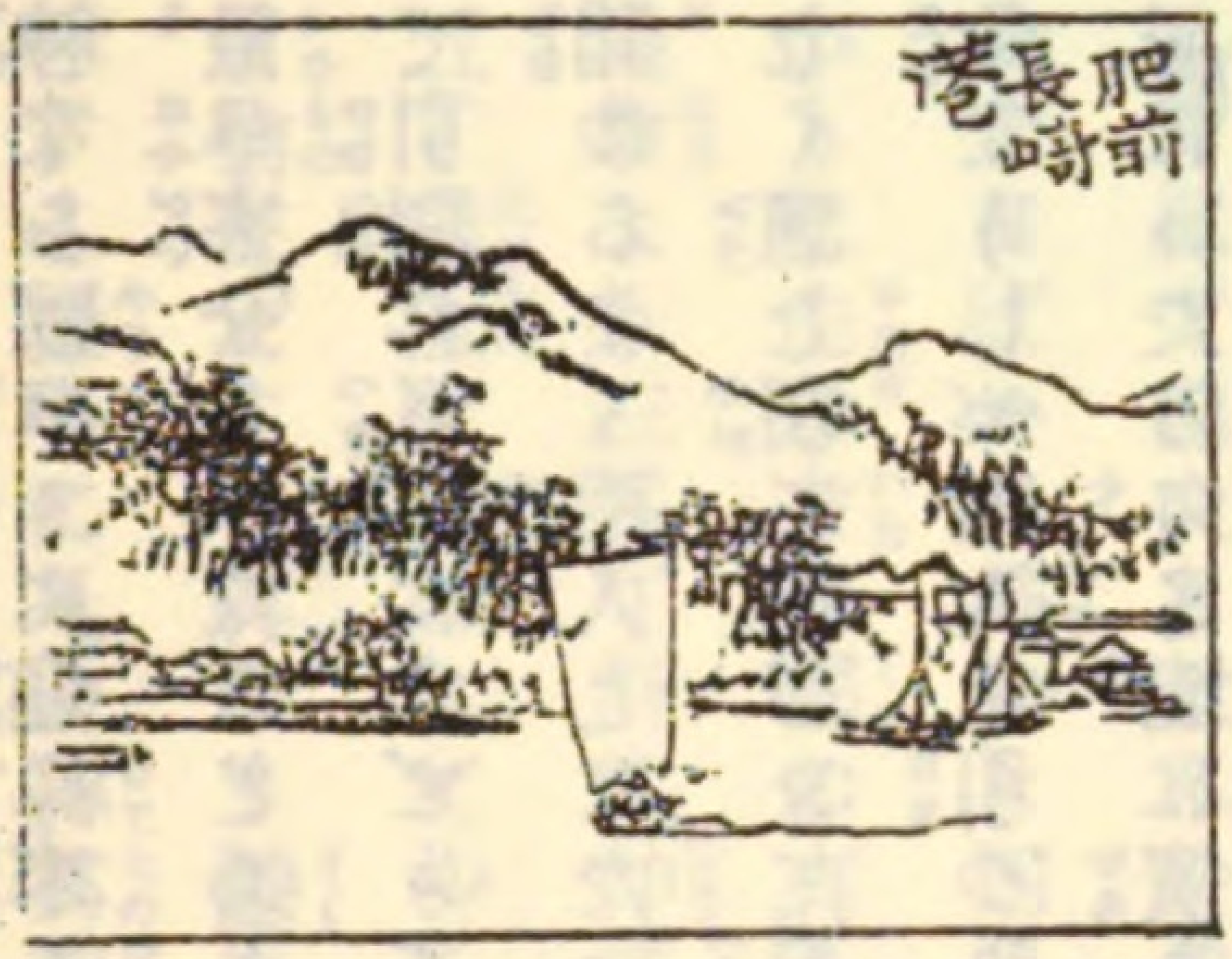
皆大聲をあげて泣居たり兩人又申様はたとひ殺さんとの巧みあるとも此知らぬ國にて何方へか迯行べきもし今宵を遁れたりとも明日は必殺さるべし迚も遁れぬ命ならば一夜を延たりとて何にかなるべき爰にて心を苦しめんよりは早く殺されたるこそましならめ我々は是非尋ね行べし若や此陸の人慈悲ありて我等を労はる躰ならば早々に迎に來るべし若我々再び歸らざる時は最早害せられたりとおもひ各覺悟あるべしと約束して引別れ月影にたどりて行けり三丁計かすかに人聲の聞ゆるまゝ兩人こなたより聲をかけしかば向よりも同じく應じ頓て近づきて月影に兩人を見て大に驚きたる体なりしが兩人を引つれて一丁餘り行き人家二軒ある所にいたる外と面に廣き牀のごときものをしつらひたる上に阿蘭陀人の様なる服を着したる人廿人ばかり集り居たり皆々驚き事を尋る躰なれども言語通ぜざれば漂流艱苦の有さまを色々と手合にて知らせければ心得たりと見へて先兩人に水を一杯づゝ飲しめ何國の人なるやと仕形して尋ねけるゆへ日本々々と再三呼はりしかば聞取しとみへてハッポン〳〵といひて合點したる躰なり兩人又今五人の者の濱邊に殘り居るよしを手眞似にて志らせければ彼の始に行逢たる一人の男付添て又濱邊へ戻り五人をも引つれ初の所へ立歸りけり

（未完）

## この内助あれはこそ

應擧の門に芦雪を出したるが如く、呉春の門下生にして嶄然頭角を顯はしたるは小田百谷なり、百谷名は羸字は巨海、海僊と號す、長門の人なり、はやく京洛に出て呉月溪に畫を學ぶ、されど月溪の畫風を嫌ひ、山陽、春琴などに交りて畫論などを聞き深く唐畫風を喜べり、よりて一度は長崎に遊び來朝せる清人に就て其奥を究めむと、心頻りに動けども家に一文の蓄へなく

殊に妻もてる身にいまだせんすべもなかりけり。我一人はともかくもすへけれど、後に殘したる妻の生活に憂なからしめんはなしがたきことなりと思ひわづらひゐたりしが不圖一計を案じ出したり。これより毎夜囈語のやうにして長崎に往き修行せんと思へど家貧しく妻ありてはせんすべなし、殘念や、口惜やといひつゝくる程に、妻もその意を察し或日夫に對ひこの事をいひ出て。かほどまで思ひ立たれしものを妾故になし遂げたまわぬは心苦しけれ、たゞ速かに往きたまへ妾は君が業成りて歸り來まん日を待のみと、百谷も大に喜びさらば暫し間待ちたまへと用意もそこ〳〵に長崎へ遊學してけり。數年の後學なりて京に歸れば妻迎へ出て喜ぶこと限りなし。立て手函のうちより金三十両を出し夫の前にさし置きていひけるやう。こは君の歸りきませし日家をなしまたふに必ず費用の多かんと兼て思ひたれば夫の他出中裁縫などして得たる料を畜へ置きたるなりけり、心置きなく消耗たまへと。百谷大に驚き喜ぶこと大方ならず、涙ながしてその厚情を謝しけるとぞ、後來百谷の名を成せしも偏にこの妻の力に頼りけるなり。




## 一詩身をたすく

むかし宋の開禧中（我朝の元久承永年間にして北條義時の執柄となりし比なり）苗氏なるものあり、もとは一かどの官吏なりしもその父の死してより母娘二人はなすこともなく、座して食へば山をもつくす譬の如く竈の烟もたえ〳〵になりね、かくてこのまゝあらんには遂に餓死するの外なかるべし如何にせばやと母娘顏

をあつめていろ〱に協議すれども、別に好き考も浮ばざりしを、或人の勸めにて娘をなにがし朝士が妾となすに定めたり。娘は哀しさ、口惜しさに堪へねど



も今ははやいかにともせんすべなければ、なく〱母に別をつぐるとき、せきくる涙のひまよりかくなん詠める。

桃花飛盡馬塍春　此日辭レ家涙滿レ巾
豈是比鄰無二嫁處一　千山萬水逐二行人一

この詩遂になにがし朝士の聞くところとなり、深く感歎して。かゝる人を妾なんどの賤しきわざさせしめんは、こゝろなきわざなれとて自ら資を分けあたへさる貴人に嫁せしめしといふ。

# 捕虜軍夫の物語

熊本縣下八代郡八代町なる小野九藏といふ男が軍夫の十人長となつて日清戰爭に從ひ終に蓋平附近に於て支那兵の爲めに捕はれ種々なる艱難を經たりしも捕虜交換によりて辛ふして生還したる其間の物語耳新しき事も尠からねば其地の新聞より撰みて小兒の寢物語の料にもと左に掲げ

九藏當年四十歲身軀屈强にして氣剛なり明治十年徵兵に應じて近衛に入り上等兵まで勤めし程なるが昨年日清戰爭起りしにつき同縣の軍夫募集に應じて十人長に撰拔され最初は第三師團に附屬して渡淸せしが後轉し



て第一師團輜重監視隊第三小隊附となり同隊が蓋平を發して牛莊に向ふ時三月六日の事なりとか九藏は凍傷に罹りて歩行も自由ならぬ故同じ患者なる三名の人夫及び一名の上等兵と共に部隊に遙か引後れて歩行なしたる

が蓋平を發して道程凡そ三里計りも來たらんかと思ふ處にて遙るか向ふより四五名の騎馬兵の來るを認めたり之は定めて先發したる日本兵の何か用事有りて後に取て返すものなる可しと思ひければ少しも怪まず益々進み行きたるに案に相違の支那の騎兵なり偖てこそ敵に出ッ喰はしたぞ四五名の騎馬兵何か有らん唯だ一蹴散らしに蹴散らして過ぎるまでと病勞かれたれど支那人の二人や三人と蓦地に斬り込まんとしたる時敵は早やくも其れと悟り馬上より法螺貝を高かく吹き立てたれば橫なる村の外づれより三十名計りの騎兵蹄を揃へて駈け出し來りアット云ふ間もあらせず瞬たく間に四人をおつ取り巻いて一齊に小銃を打ち放なす彈丸の飛び來る事雨霰の如し、上等兵の某は脇腹を射貫かれて堂と倒ほれぬ九藏を始め二人の人夫は如何にもして之を助けんとしたれど奈何んせん三十餘人の馬隊より取巻かれて八方より射擊さるゝ事なれば其身一つさへ遁がるゝに路無く進退全く谷はまりたれば不本意ながらも之を打捨て三人は懸命必死に同し方向を指して逃げ出したるが逃げつゝ後を顧みれば深手を負ふて倒ほれたる上等兵の傍には五六名の淸兵立寄つて刄を逆手に持ちつゝ上等兵の身躰を滅茶突き突き居るを見たれば餘まりの哀れさに目もくれ力も拔け足の働らきさへ儘ならずなりたれど此處一髮の油斷を許さぬ塲合なればと我れと我心を勵げましつゝ一目散に駈け拔けんとする時三人は早や騎馬兵に追ッ着かれて九藏先づ頭巾越しに鐵棒の打擊を受けウンと云ひ樣其の塲に氣絕したりやがて正氣附きて眼を開らけば其の身は既に手と足とを縛ばり上げられて括くり猿の如くあはれ果敢なき樣になり居たり他の二人のものも同じく縛ばり上げられて無念の齒を嚙み居れり斯かる間に一人の支那人荷物の運搬に供する一輛の荒馬車を引きこれに九藏等の三人を載せ擔き載せられつゝ不圖氣附きて傍はらを

見れば車の上に荒莚もて打覆ひたる下に何やら蠢々と動くもの有り鮮血の少しく流がれ出でたるに若しやと驚いて見れば上等兵の某なり偖ては未だ息の根の切れでや有りけむ嘸かし無殘なる目に逢ひつらんと思へど身躰は莚の下に隠くれたれば見るに由なしホワホワホワと驢馬を叱かる聲の聞へて馬車は動き出しぬ小砂利を噛んで荒馬車の軋しり行く事なれば揺り上げ揺り下しにガタピシと音して動揺甚だしく唯ださへ居苦るしき程なるに數ヶ所の痛手に悩める莚の下なる上等兵の苦痛は如何なりけん車の動揺に連れて苦るしき悲鳴を擧げ折り／＼口惜し無念と云ふ聲の哀れに聞へ滾々と流がれ出づる血潮は車臺に溢れて車軸まで唐紅に染なせる凄しさ修羅道の苦しみも之には増さじと思はれ三人の人夫は唯だ男泣きにワン／＼と泣き叫びぬ兎角する間に莚の下なる上等兵は殘念々々と云様がバと刎ね起きぬ此の其時容躰を見れば髪の毛逆立ちて顔色青白ろく身躰は一面あけに染みて腹のあたりよりは尚ほ赤黒ろき血潮滾々と流がれ出づる様哀にも亦物凄し上等兵は荒莚刎ね除けてムク／＼と起き上がり無念々々と幾たびか叫びつゝ腹の疵に手を突込みて腸をグイと引き出だし憎つくきチヤン／＼坊の振舞かなと云ひながら幾たびか頭の上に振り廻はし護衛として傍らに附添ひ居たる支那兵目掛けてハツタと打附けたれば鮮血パツト迸りて其儘息は絶へにける無殘と云ふも愚かなり斯くて凡そ道程の一里半計りも行きたらむかと思ふとき護衛兵の指圖にて馬車は止まりぬ兎見れば髯有り丈高くして青龍刀を手に持ちたる騎馬の清兵馬上よりヒラリと飛下りて持ちたる青龍刀をりふ／＼と打振り上等兵の屍骸に向ひ何やら分らぬ事を二口三口喋舌べり居たるが長刀一揮忽まち首足處を異にしぬ其首を取つて車に載せ三人の人夫は元の儘になして又た車を進めたるが程無く清軍の兵站部とも云ふ可き處に着

しむ此處にて捕虜の人夫共を馬車より引下ろし清兵の將官とも見ゆ可き者の前に連れ行き突据へぬやがて將官の訊問初まりたるが言語通ぜざるを以つて筆談に代



へたり幸ひにも三人の中にて小野九藏少しは文字有りける故之れに答へたるが彼の尋問は『大鳥公使は今何處に居るや』『日本軍は之れより何處を指して進軍するや』など實に抱腹絶倒に堪へざる事のみなりしも九藏は唯だ其身人夫なれば軍隊の事などは一切與り存せずと答へて濟ましぬ是處にて一應の訊問終りたれば三人は直ちに遼陽の獄に送られ支那人の囚徒と一處に繋がれ二人の兵を附して之が監守をなさしめたり斯くて食事は日に兩度米の薄粥を給せられたるが兩手を固く縛せられて手の働らき自由ならざるを以つて監守人が一々匙にてすくひ取つて口に含ませ呉れたり言語少しも通ぜざるを以つて兩便など催ふす時用をたさん事を告ぐるには手眞似を以て之を知らせよふ〱意を通ずる事を得るなど頗ぶる難儀を極めたりそが中に尤も困却せしは虱の其身を攻むるなりけり背腹手足の嫌ひなくひた攻めに攻め立つるには三人流石に困まり果てたりしが程經て九藏前に縛せられたる手を一性懸命に搖すぶつて繩を緩るめ其れより手を拔ぎて痒ゆき所を搔く法を發明し之を三人の者に傳へたる故其後は稍々自由を得るに至りたれど若し之を監守の兵に見出されては一層辛らき目を見るに至るべしと思ひ搔き終れば又手を元の繩に差し素知らぬ顔して澄まし居たり玆に尤とも不思議なるは彼等が凍傷の治療を懇

ろに加へ呉れたるなり是のみは日頃の仕打ちに似合はしからぬ事と覺へたり是治療の爲めには絶えず一人の醫者見舞ひに來り瓶の中より何やら知らぬ粉藥を取り出し之を水に和して練り交ぜ軟膏の如くにして疵の所に叩き附け其上を油紙被ぶせて繃帶なし呉れたる故疵所も程無ふ全癒するに至れり

凍傷の平癒したる後三人は引分けられて各部隊に配賦せられ其隊にて監視する事となりたるも唯だ檻の中に繋がれたるのみにて使役にとては供せられず空しき月日を薄暗らき世界に詫しくも暮らすのみなりき食事は午前八時と午後四時の兩度に兵士と同樣なる薄粥を給せられ唯だ朔日と十五日に少量の酒を與へらるゝ事となれり是等は以前に無き事なりし斯くて六月にもなりぬ或日の事九藏は將官の室に呼出されたり至ればきらびやかなる軍服を着飾りたる將官の一人九藏を眼下に呼びて今度我大清と日本との平和全く成りたるに付き八月上旬には屹度其方も本國へ送り還して得さす可しと筆談にて言聞かせたる故九藏は天を拜し地を拜して喜び勇み唯だ指折り數へて芽出度き八月の來らん事を待つのみなりしが或日又一人の支那兵來り今度臺灣と日本との戰爭初まりたるに付き迚ても御身等の歸國は六つかしかる可しと云事を指先にて地に書いて見せてポコペンナと云ひつゝ立去りける故折角心に繋ぎし希望の綱もポッツリと切れ今は全く世に望み無くなり唯だ天に任かするの外は無しとあきらめ居たり斯くて絶望の中に果敢なき月日は立ちて八月にもなりけるが或日又將官の室より呼出しを受けたり若しやと心躍るまゝ落膽の中にも一縷の希望を抱きて至れば練兵場とも思はるゝ廣庭に數多の兵士整列して圓陣を作くりたる中に引出されぬあたりを見れば我と一處に捕はれたる二人の人夫も其傍に在りける故顏見合はせて互ひに相喜び無事でありしか嬉れしき事よと口には云はねど目

をもて語り合ひぬ兎角する間に其中にて尤とも貴き官位を有す可く見ゆる一人の將校五六の從者を從がへて出て來りぬ服裝の華麗なる帶劍の光かり輝やけるなど一見人の目を驚かす計りなるに彼等の贅澤なるや水煙台さへ我手には取らず煙を吹かんとすれば從者忽まち來りて煙草を詰めて之を口元に差出すに貴人は唯だ之に口を着けてスパ〳〵と煙を吹かす計かりなり是等は絕へて本國に見ざる所の贅澤と三人均しく驚きぬ此席に於て初めて日本國と捕虜交換の行はるゝに付き三人の者も日本軍の手に引渡たさるゝ可き旨を云ひ渡たされ新らしき支那服支那履各一個づゝに銀四兩を添へ路用として渡されぬ斯くて愈々兩國の捕虜交換は九月一日を以て鞍山店に於て行はれ三名の者も他の捕虜と與に我軍の手に引渡たさゝに至りぬ其後九藏は大連灣の方に廻はされ同灣より歸朝の途に就き去る九日當地に無事歸着したり茲に尤も奇なるは九藏の宅にては既に九藏を此世に亡き者となし法會を營み居たる處に熊本細工町の宿屋より九藏の手紙來りたれば家內の者共は夢では無きかと驚ろき騷き緣家親類出迎に來り九藏に逢ふて笑ふやら泣くやら夫は〳〵中々の情態なりしと云ふ左もある可き事共なり斯くて其後九藏は宅へは歸らず今度無事にして歸朝する事を得しは全く讚岐の金比羅樣を念じたるお蔭なりとて其報恩參詣の爲め早速讚岐に向つて出發したりと云ふ

心あてにならばやならんはつ霜の
置まごはせる白菊の花　（凡河内躬恒）

# 家政

## 家庭教育小話

入江好治郎稿

おのれも敎育の道をいそしむもの無經驗ながら家庭に

て斯くせられなばいと善からずやと思ふことあれば思ひ出づるまゝを記さむ。

第一家庭の命令及家庭と學校との命令は矛盾なからむを要す。

我國中等以上の家の父母は或は口づさみて曰く『家庭教育は大切なり』『先入主となる恐るべし』などかく言ひながら其爲す所間々言行一致せざるものあるを視る豈愼まざるべけんや凡そ命令なるものは重且大にして是非兒童をして服從せしむべきものなり然るに家庭中父は曰く『我が海國の臣民たるものは幼時より能く水練するを要す放課後に於きて水泳熟達の人を遣し師事せしむべきにより或は河湖に端艇の競爭を試み或は激波大浪を横ぎりて游泳を自在に練習すべし云々』と兒之を聽き喜びて父より與へられたる水手と倶に水邊に往かんとするに當り此等の事情を悉さゞる母は途中出會がしら兒が櫂を持つを視てとり大聲疾呼止めて曰く『縦令如何なる事情あるも河湖に游ぶ如きは危險の極母の望まざる處なり決して往くなかれと』兒之に應じて曰く『何の危險かある父の命なり大和男子誰か海をみて危險となすものあらんや』と言ひ去て湖岸に馳す兒の心中母の無智を誹るもの〻如し如此有樣にて母の威重何かある命令の性質に悖りて其極兒童が父母の命令の曲直を批評抗擊するに至らざるも爲に家庭の威嚴を失ふや明なり況んや父子の關係なき學校と家庭との間に命令の矛盾を生じ又同一學校内にありて甲乙教師の命令に矛盾する如きあらば到底教育の功果を結ぶと能はざるは昭々たる次第なり。

こゝには只水泳を引證したるのみなれど一切の命令は皆然りとなす誠に愼まざるべけんや此事や實行するは非常の困難の樣なれども家族會議及學校家庭の連絡會議等に方便を利用して一致の命令を下さば厲行するを得べきが如し。

第二父母は惡き遺傳性を打破せんことを勉むべし。

家には大抵特種の遺傳性あるものなり例を徳育上にて云はゞ彼家は親切なり此家は家内仲惡しなどいひ智育上にて云はゞ彼家は手筋の善き家なり此家は思考力に乏しき家なりなど云ひ體育上にて云はゞ彼家は軀格よき家筋なり此家は氣狂ひ筋なりなど云ふが如し而して其性質中善良なるものは他人のほめたてにより嬉しさの餘り益々黽勉し爲に代々進歩するの傾あるも之に反して其害惡なるものは他人の冷評を得て憤りの餘り姑息にも此を隱蔽せんとのみ心掛け決してこれが改良を企て永遠にこれが恢復を圖るもの丶なきは國家といふ大なる考より觀れば慨嘆せざるを得ざることどもなり現今の普通小學校の敎育は連りに三育の並行進歩せんことを勉めらるにも拘らず父母は反りて此等の姑息手段に陷り其極や學校敎育の功果を結ぶ上に於きて大害を及ぼすに至る嗚呼敎師の助力を家庭はなさゞるのみか猶も徒勞を致さしむこれ何等の考ぞやこれ何等の行ぞや。

國家てふ思想あり學校家庭連絡の必要を知れる世の父母たるものは家庭に於ける從來の惡性を打破するの奮發心勃興するなるべし果して勃興せしならば軀育に關する惡性は醫師の命に隨ひ徳智兩育に關する惡性は自ら社會的制裁及良心に反省して其自己の尤も嗜好せざる事柄にても如何に困難とする處にても家のため害惡なりと認めたる性質は悉くこれが改良を全くすることに勉むべし抑も家の惡性なるものは病の一種なれば醫療するを得ること昭々たりつとめよや斯く論じ來らば無論家の善性は益々進化せしむべきものたるや疑ひなかるべし。

第三家庭には系圖を調へ祖先の偉勳功蹟を顯彰すべし。

歴史は兒童自らの奮發心愛鄕心を喚起し黽勉力を奬勵

するの上に於きて非常に有功なるものたるは世論の確定せる處にして内外古今の英雄豪傑が古來の傳記逸話を讀みて大に奮發し芳名を轟かせし事實に徵しても之れを證するに足らん而して我國の同胞に向ひ一家の歴史たる系圖紀錄のありやなしやと問はゞ或は答へんありと或は答へんなしとよしさらば有る家は此を續けて記し給へ無き家は今より始め給へ決して虛構を用ゐざれかゝらんには代々の子孫これを見ては功勞ある祖先を敬崇して此に似せんと奮發し失敗せし祖先に照校して之を避けんと反省するを以て非常に精神的教育の幇助となるべし。

この系圖及記錄を調ぶるには別に資財を要せざれば萬屋擧りて行ふに難からず猶餘財の許すあらば今一つ崇高なる祖先代々の眞像を一樣の形狀紙面に摸し順序正しく美しく装飾せる奥坐敷に掲げ置き年忌及誕生日等の紀念日にふれ兒童にみせ又はこれが說明の勞を執られたきものなり斯の如き時は一は以て坐ろに孝順愛敬の情を惹き一は以て美を愛するの念を起さしむべし去れどもこは未だ我國の一般民度に適せざる話なれば兎に角系圖と紀錄とだけ整へられたきものなり。

第四明治の世の家庭が歴史上今後記憶すべき事柄。

父母は教育に關する一切のことを知悉せざるべからずされども夫々事務のあることなり且人の腦力には限りあること故無限に記憶せらるゝものに非れば其内教育の骨髓となるべき肝要なる事柄だけに止め制限をたてゝ覺ゆべきことなりかくてこそ偶發の機會に際し適當なる家庭教育を施すを得べけれ。

余が友人嘗て佛國に遊び歸朝後其話す處を聽くに曰く『彼國にては國辱たるアルサス、ロートレン、を以て教育の骨髓とせるもの丶如し其家庭の寢物語は多くは軍人の逸話實業家の美談にして學校の教科書には何れも

普佛戰爭に關することを以て充てたり然して地理歷史には最も意を注ぎ地圖の如きはアルサス、ローレン、を自國と同色に塗抹し或は自國の色は特に麗しく彩りて愛國思想を喚發し或は兒童に向ひて海の祖父は何處にて何のため死せしか海の父の腕なきは何故かなど詰りつゝ專ら敵愾心を養ふ此結果により戰爭に於ては大敗を執りし佛國後反りて經濟上に於きて大勝を得たるのみならず一旦緩急あらば義勇以て國辱を雪がんと念へる兒童多し云々』と嗚呼偉功あるものかな敎育の骨髓を定むるとは。

然して我國の歷史中新しき印象あり且は明治の世の今後の敎育の骨髓ともなすべき重大なる事柄は樺太群島の交換及金洲半島の還附是なり此等の交換及還附は何れも正理に隨へるものなきは決して佛國の如く國辱となすべき土地ならねど上は以て至尊の宸襟を惱ましまつり下は以て同胞の鮮血を流さしめし處なれば輕々看過することなく之によりて兒童の敵愾心を養成し以て軍事敎育實業敎育の進歩曠張を計り國家の富强を求むべきこそ家庭の職務なれ以上は明治の臣民たる家庭が其賢愚貧富に論なく凡べて記憶すべき事柄なれども此に次ぎて心意に餘裕あらば記憶を要するもの亦少からず大畧をあぐれば左の如し。

イ天祖の詔勅。
ロ今上天皇陛下及皇太子殿下の御名。
ハ國名及國旗の由來。
ニ敎育に關する詔勅。
ホ日淸宣戰の詔勅。
ヘ軍人に下し給ひし勅諭。
ト祖先代々の忌日。
チ山田長政、濱田彌兵衛、支倉六左衛門、等の傳。
リロビンソンクルーソー談の如きものにて我國人民のなせし事柄の裏物語。

ヌ批准交換の詔勅。
ル憲法及六法の大畧。
オ三韓征伐。
ワ元寇の役。
カ朝鮮征伐。
ヨ湖南事件。
タ馬關事件。
レ家屋建築記念日。
ソ明治の大地震。

此他數多あるべけれども内尤も重なるものをあげたる結果は右の如し　（完）

## 家庭と學校

まばのや

おしなべて世の親は尚ほ學校へ入るほどの年ならぬ小兒の精神上の進歩を大に樂む癖あり。片手にも屆かぬ年頃の童男女が君が代はた、天長節の歌などを唱ふるは、其聲音の愛らしさ實に奥行かしき心地すれど、未だ精神を練るべき時にもならぬを強ひて爲さしむるは害こそあれ決して益にはならず、彼の草木の芽にても、人工にてあまりに早く實のるものは枯るゝも早き如く成長する人間の力も之に堪へざるの力を強ひて求めなば、其未だ充分に發達せざるに先ち、まゝある如く童男女などが未だ家庭にありし時活潑なりとか、伶俐なりとか、とて人々に、もてはやされし身が學校に入るに及びて却て打て變はりて、少しも、はかはしからずなりぬる事おほきぞかし、昔話に百姓が思慮もなく田畑に肥さへ施せば數倍の收獲ありやせんとて無暗になせしが爲め却て一粒も出來ざりしと同じ事にて、あれば呉々も精神を時の來らさるに發達せんと欲するは甚だしき事なりとは云へ道德敎育の準備として初めよ

り之を少しづゝ敎ふるは之にたがひて嘗て獨乙の詩人「キョーテ」が歌に「天質尊きの小兒の此世に出づるには、數々を持ちて來り天然は其生涯間に要するものを皆與へあり、されば兩親の義務は務めて之を發達するにあり尤も時には自づと發達する事もなしとせず、然し一つ持ちて生れざるものあり是そ人間が何方に對しても人間たる事を得るものにて即ち畏敬心なり」云々人間は如何に幼稚なりとは云へ縱意の幾分を有す、是れあらされば、敎育しても益なし何となれば小兒が自ら定めたる意志を壓し嚴に失して屈從せしむれば決して有利なる利益は希望すべからず、然れども童男女が自ら意を屈して從ふが如く敎育するも亦緊要なり、世には太郎が學校に赴くに際し「柔順にするのだよ」との一言を與へて已に敎育者の義務を盡したりと信ずる兩親も鮮からずして此訓戒は、よきには相異なきも餘りに屢々繰返せば慣習となりて少しも其効力を有せざるに至るものなり、例へば太郎は忠實に仕へたる權助が行爲中に笑ふべき節にてもあらば、得たり、かしこしとて之を嘲罵するの癖ありとせよ、兩親も共に小兒の愛に溺れて之を共にするあらば、如何、遂に大人を畏敬ずる念慮とては少しも有せざるに至るなり成程畏敬の義を小兒に敎ふるは出來ざるも日常習慣を積むに從ひ大人には服從すべきものなることを知るに至ればよろし、小兒の尊敬は從順に存するものにて此從順は小兒の第一の寶にてあれば、學校へ入るに先ちて已に之を知らねばならじ學校は此點に欠くるあるも決して之を補ふ事は能はじと心に浮びしまゝ書きぬ。

## 新聞紙を讀む心得

な、み、生

新聞紙は天下の耳目なり之れを讀めば天下の出來事大

小となく坐ながらにして知る可く日々の談話の種此の内より得らるべし之れを讀まざれば世事に暗くなり行き所謂世間知らずとなるべし

我國今や文明の域に足を入れそめ女子敎育論至る處に盛に行はれ婦女子の位置も追々と高められ隨つて婦人にして新聞雜誌の類を讀む樣になり加之東京西京等の都會に於ては或は慈善會或は婦人矯風會等の設あり又其れ等の機關として婦人自ら雜誌等を物するに至りたるは吾人の最も我婦人の爲めに我國家の爲めに慶賀する處なり

一喜一憂は世の常今日新聞紙を讀む我婦人は果して何の欄何れの項に目を注ぐやを探り來れば誠に悲む可きものあり其多くは新聞紙の來るや否や頁を轉じて第一に繪に注目し坐するをもまたで小說を讀み終てまた頁を轉じ去る何日某地に於て情死等の諸項を一々讀み來り讀み去り而して他は敢て顧みざるもの丶如し吾人は殊に之れを妙齡の婦人に見る豈歎ず可く憂ふ可きの現象ならずや

回顧すれば十數年前嚴父在世の時大に深く此に着目する所ありてか我等兄弟數人の者は其病床より新聞紙を讀むの心得と題し一書を送れり今茲に之れを截轉して以て敢て愛する兄弟姉妹の坐右に呈す

新聞紙を讀むには先づ必ず日々の政府の法令（即ち布告）を拜讀し續きて世事の雜報に及べし

右の通りの順序を以て讀むべきものなり政府の御布告を知らざれば日本の土地に住居して居りながら日本の人民にはあらざるべし人々と交際日用の事を辨ずる能はず假令婦女子と雖も權利を男子と同ふするの論世に喋々たり必ず讀まねばならぬなり

雜報を讀むは是れ又日用欠ぐべからさるものなり遠く東京大坂等の有樣數千里の外に達するも此の雜報を讀まざれば其効用なし世態人情及び人々相互の交

際等皆必用のものなり之れを讀まざれば世間知らずと云ふ可し

新聞の末に繪を入れ色々樣々の事を作り出し作者上手なるものは前後の內勸善懲惡の意を含むものあれども多くは唯面白く書き綴るものなり此の咄しは最も婦女子の心を慰むるものなれども箇樣のものを心に注して始終樂む時は風儀を亂し道義を破る等の甚敷きに至るべし戒めて必らずウカ／＼と續きもの計りに目を付けぬ樣にすべし。

## 手藝案內

### 小兒小女の衣服

來る十一月十五日は例年の通り小兒小女七五三の祝なり（女兒は七歲と三歲、男兒は五歲）美衣をつけて氏神などに參詣するを常とす、其の祝衣の流行衣服は流行の栞に其の專門記者の意見あれば、こゝには唯其仕立かたの一斑を記すのみ

男女兒を通し七五三の祝衣は三ツ身と、四ツ身なり、七歲着の上等なるものは、質素なる色と柄とを撰みて十六七歲の妙齡に至る迄間に合ふやうにするは德用向の仕立かたなるが、半反（譬へは一丈三尺二寸）を以て三ツ身仕立とせんには兩袖各二尺七寸五分、合計五尺五寸を取り（其九寸巾の內二寸巾三尺六寸を取りて襟とす）殘り七尺七寸を喰違に立ちて身ごろとおくみとせば丈二尺五寸五分、袖丈一尺三寸五分、袖つけ五寸、身のあき七寸褄下一尺おく身さがり三寸、襟丈一尺七寸襟巾一寸を得べし、袖を長からしめんには兩袖合計六尺もあらば可なるべし、三四歲より六七歲までは三ツ身にて間に合ふ、但しこれは尋常の仕立かたにして紋織又は二尺巾物の裁かた本雜誌十二號を參照ありたし

四ッ身は四五歳より十三四歳まで着用せらるゝものなり、玆に普通の裁かたを案內せば、二丈三尺二寸の內より六尺を裁ち取りて袖となし、又三尺一寸を取りてそれを四寸五分巾に兩分しておくみとなし、其殘りの分は身ごろとなす、但し其の身ごろとなる分は七寸巾一丈四尺なり、襟は二寸巾一丈一尺四寸は身ごろの分となる九寸巾より得らるべし

小兒及小女の流行服幷裏地其他仕立かた等は前號及本號の社交欄內を見玉ふべし

◉家庭教育の一手段　家庭教育の方法數多ありて、或は繪畫に、或は玩具に、種々考案を凝したる物あり、而して幻燈の應用の如きは終始幼童の心を喜ばしめて、不知不知の間に利益を與ふる事多し、歐米各國にては、其貧さ富さを問はず必ず一個の幻燈器械を家に備へ置き家庭教育の實を擧ぐるに、吾國にては未だ其方法行はれざれど幻燈映畫には修身、歷史、物理、植物、動物、生理、衛生、天文、地理を初さして百般の學術に應じたる幻燈畫あり、夜間室內などに映寫紙を掛け置き、之に諸般の繪畫を寫して幼兒の心を慰めながら諸般の學術を記憶せしめば再び忘るゝことなかるべし、近頃華族及紳士を始め家庭教育に志あるものは幻燈を用ゆるもの近年多々增加せんとする傾あり新橋丸川商店にては此目的にて幻燈機械を販賣すといふ

# 社交一斑

## 流行の栞

春夢

### 男兒五歳着の祝衣

前號には女子七歳着の祝衣のみの案內を記したり、今度には左に男兒五歳着の祝衣を記さん

（第一） 黑七子三ッ紋の上衣に淡柿又は古流鼠無地の下着を重ね、黑七子三ッ紋をはをり紋織博多の帶を占め萠黃糸入の仙台袴を穿てば言分なき扮裝なり

（第二） 七子又は奉書紬の黑或は鼠の三ッ紋に淡泊なる糸織中縞の下着を重れ（裏は花色絹）黑又は鼠の三ッ紋の羽織に前記の帶と袴を撰まば八方向の嗜好に適す

（第三） 羽織を黑の三ッ紋に好み衣物を上着糸織下着を縞八丈とせば中等のこしらへなり（但し袴なし）

（第二）（第三）の場合に用ゆべき帶は白茶とお納戸の博多の捧縞、淺黃又はお納戸の獻上海老色又は小豆色の團十郎擣子最も流行の旨に適ふさて羽織、着物の入尺は女子と選び大抵四ツ身立則ち一丈八尺より二丈までを用ゆるなり

次に羽織及着物の紋の大きさは鯨六分五厘より八分までを上乘とす

羽織の裏は淡泊なる縞又は綸甲斐絹に定まれるが如し

價格は（第一）一襲二十圓より二十五圓（第二）十七圓より二十二圓（第三）十三圓より十五圓

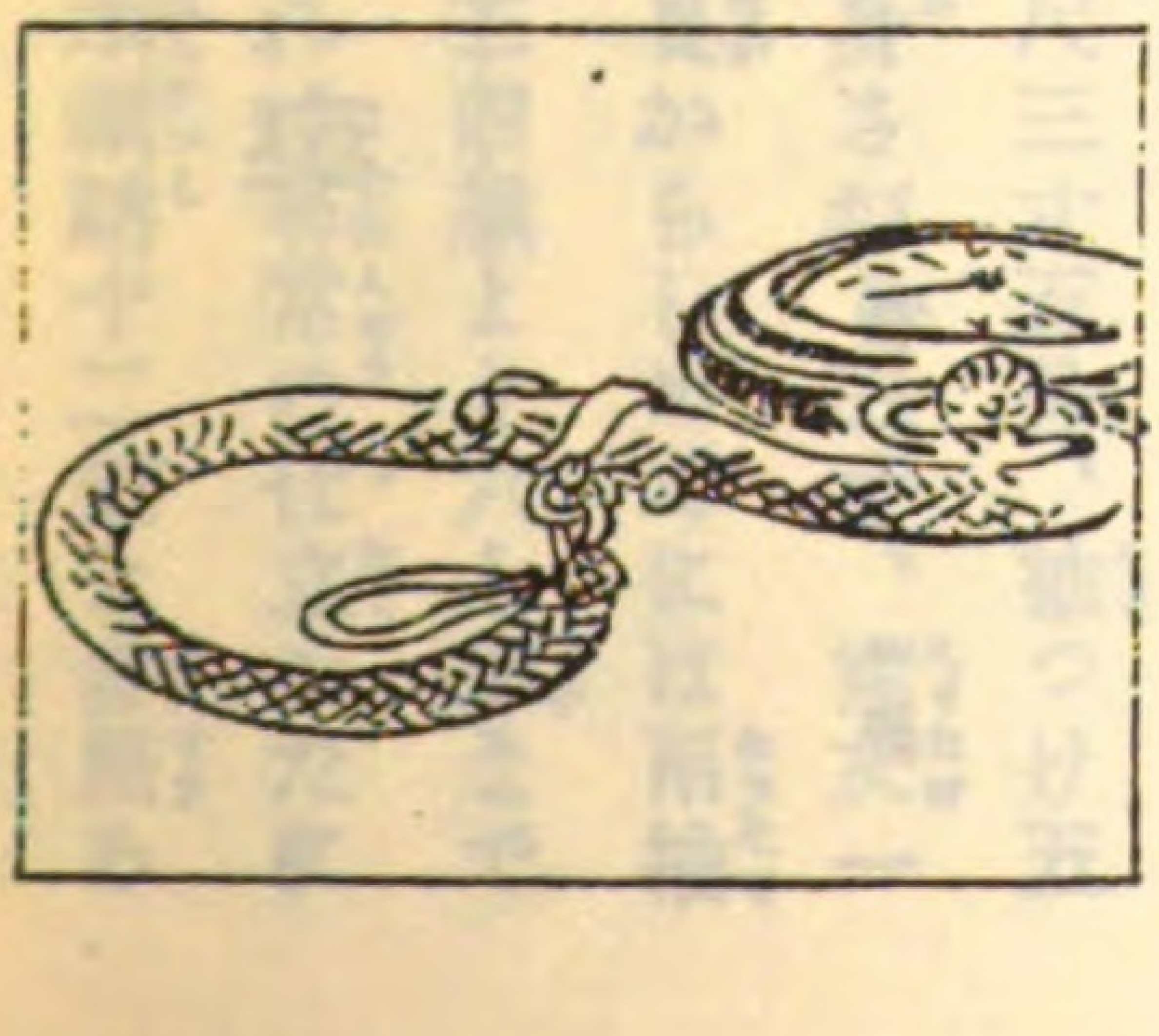
## 流行の半襟

襟善にて賣捌く一かけ五圓十圓の半襟の流行は餘り貴族的なれば流行の半襟として紹介するに及ばずコヽに一般の用ゆる一かけ三十錢より一圓五十錢位の半襟の流行を案內すべし

さて半襟は言ふまでもなく年齡によりて色の濃淡模樣の大小あれども流行は無地の縮緬に種々の模樣を縫ひ出したるもの頗る全盛の勢あり其の流行色と柄は素鼠に白の菊と白茶の葉、同色の白と淡淺黃の菊の葉、淡葉鼠に古代鳳凰と桐、貴族鼠に櫻の色糸の浮模樣、べにかけに白と金の菊、藍鼠に貫向菊、千歳鼠に蔦に牡丹、淡小豆に八重櫻に蔦模樣、藍氣鼠に桐模樣、貴族鼠に金茶べにかけ肉色の夏菊、べにかけに江戸菊、同色に古代草模樣、淡茶鼠に白と草色の蔦かつら、銀鼠に黒の夏菊、藍鼠に白の菊桐、小豆に彩色蔦、藤色に古代菊と蔦、淡鼠に白の源氏、壁鼠に共色の菊、深川鼠に菊の葉、黒の一坪、立わく及銀モールの古代菊、同地黑の金の古代菊桐等にして染形に至りてはべにかけに彩色の菊と桐、紅かけに古代兎と牡丹、黑の吹雪、矢車、古代牡丹、紫地に夏菊紫陽花、其他草色、かべ鼠、あづき、藍れづみ、淡葉れヅみ等の菊、桐、紅葉、鳳凰、牡丹等の古代形の中より撰まば流行に遲るゝことなかるべし

## 新形時計紐

昨今の新形とも言ふべき時計紐は、絹の丸打にて心に螺絲を入れ、其金屬製のトメをつけ、容易に緊解の自在にするにあり、（其形は挿畫を見玉へ）色は濃お納戸、鐵、紺、淡茶、錆色等、定價三十錢位飾付四十錢位



# 雜録

## 支那人の理想畫

左に示すは清國の士官が自筆せし一冊の畫帖より抜きて縮寫せしものなり贊辭をも添へて

紅李中一眼

紅李中間一眼睛
長驅蹈臣入神京
無端惱了三宮桂
一但乾坤盪大淸



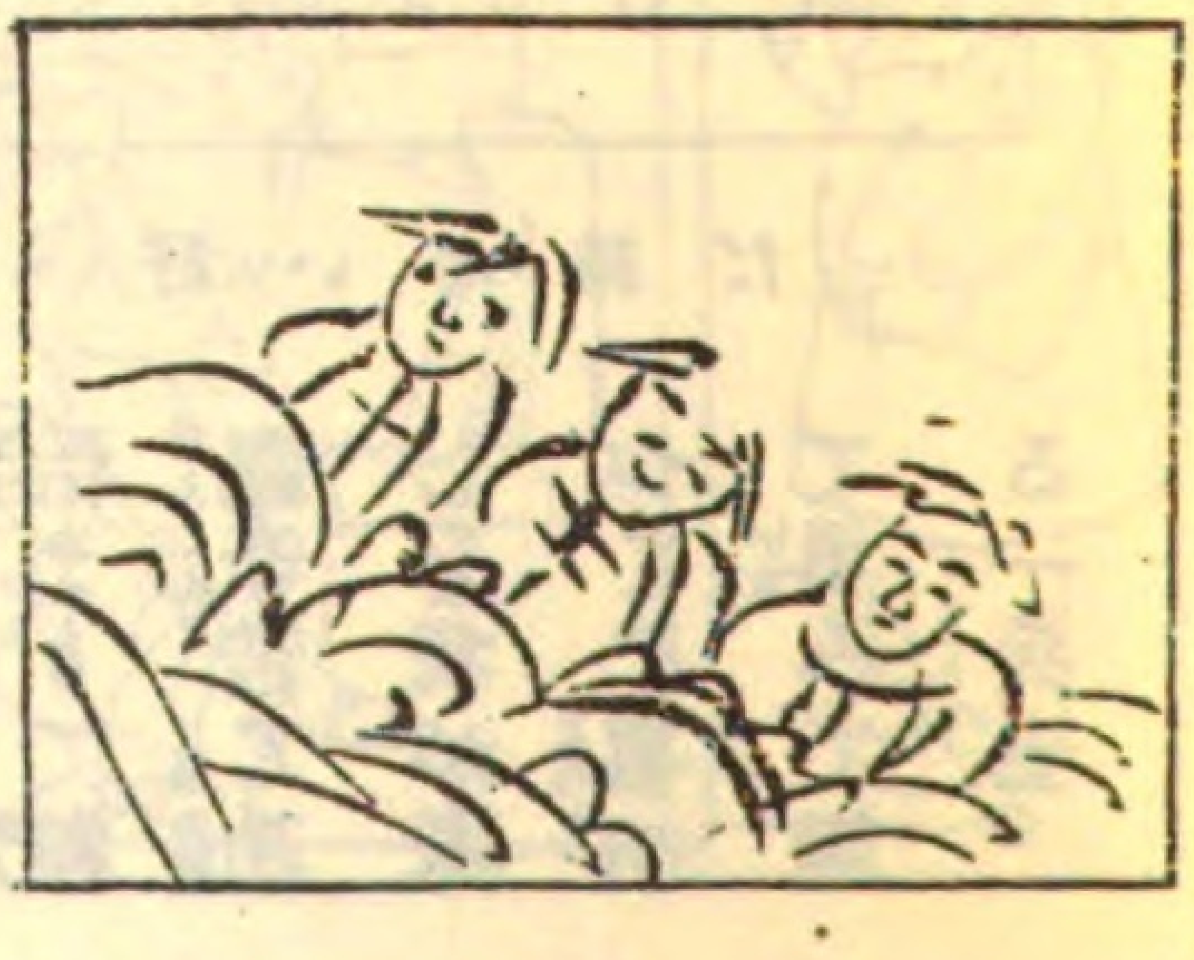
次に　一弓掛樹岸上一猪水中一鼈

一止存心十四休
將弓掛在柳樹君
人中佳用千斤力
依舊还远二百秋



次に　數人在水中

西山犬吠東海人
開運王家作庶臣
家々女人無活計
丈夫總是溺河津

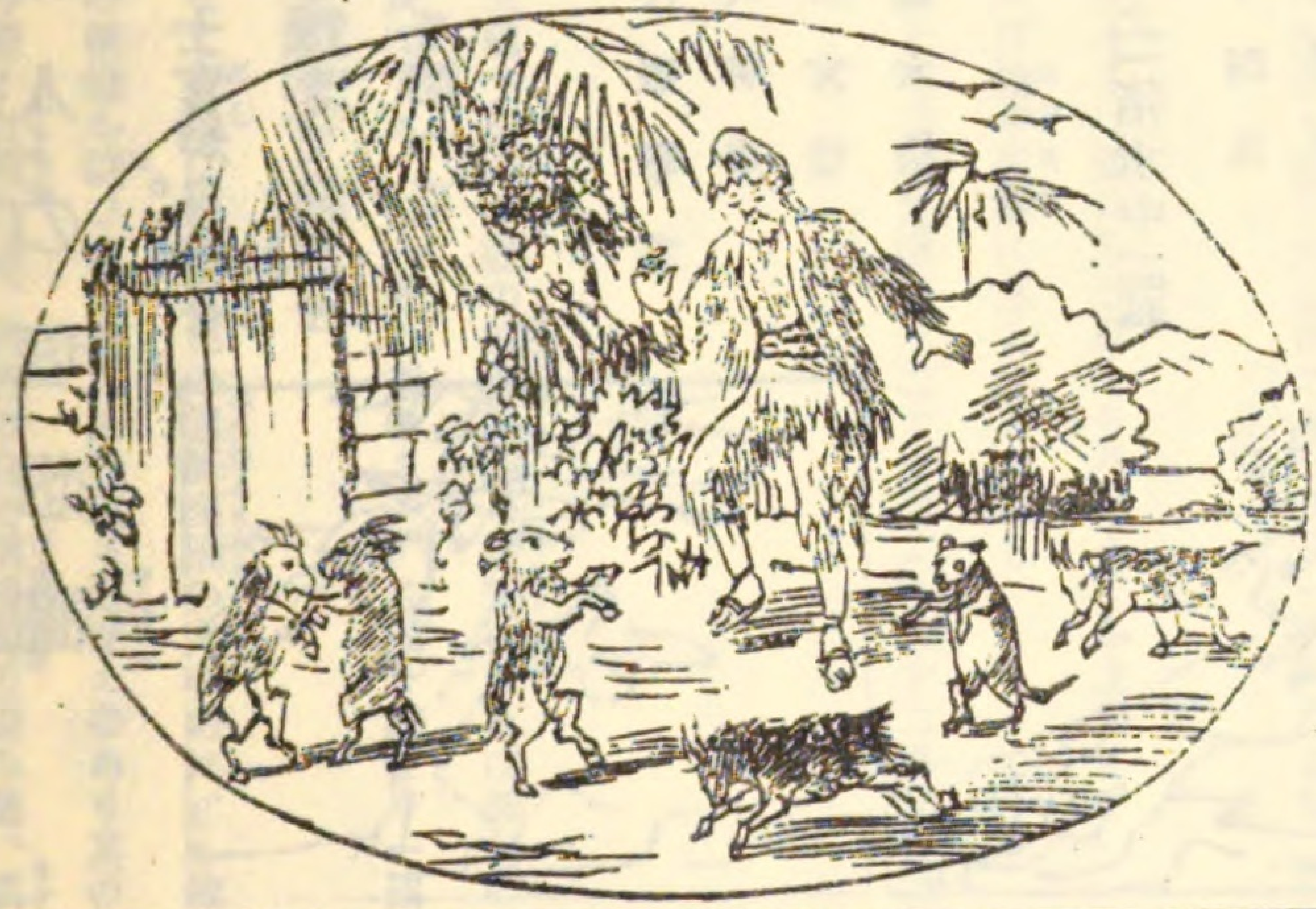


其内時世を諷刺したるもあり、以て彼等の理想を見るべし

## ロビンソン、クルソーの種

デフヲの著「ロビンソン、クルソー」漂流談は三尺の兒童も能く知る所にして頗る人口に膾炙す、然れども此物語の起りし本は今より百五十年前英國の水夫アレキサンダー、セルカークがチユアン、フアナンデッズ島に漂着して單獨の生活を爲せしより取りたること疑ひなし

挿畫に示すものはセルカークが無人島に在る間自つから其寂寥を慰めんと山羊など、仲間入し、彼等と共に歌ひ或は踊れる有様なり、彼が着たる衣服は其島内にて毛皮を集め、これを同じ皮紐にて縫ひ綴ぢたるを用ゐぬ、細長の貝殻は能く針の代用を爲し、彼の所持せし「ナイフ」が使用に堪へざるに至りては、偶々濱邊に打ちあげられし鐵のタガを用ゐて漸く日用を辨じぬ、ロビンソン、クルソーの漂流談は此の細密なる消息を傳へたるものなり



## 歸鄕兵

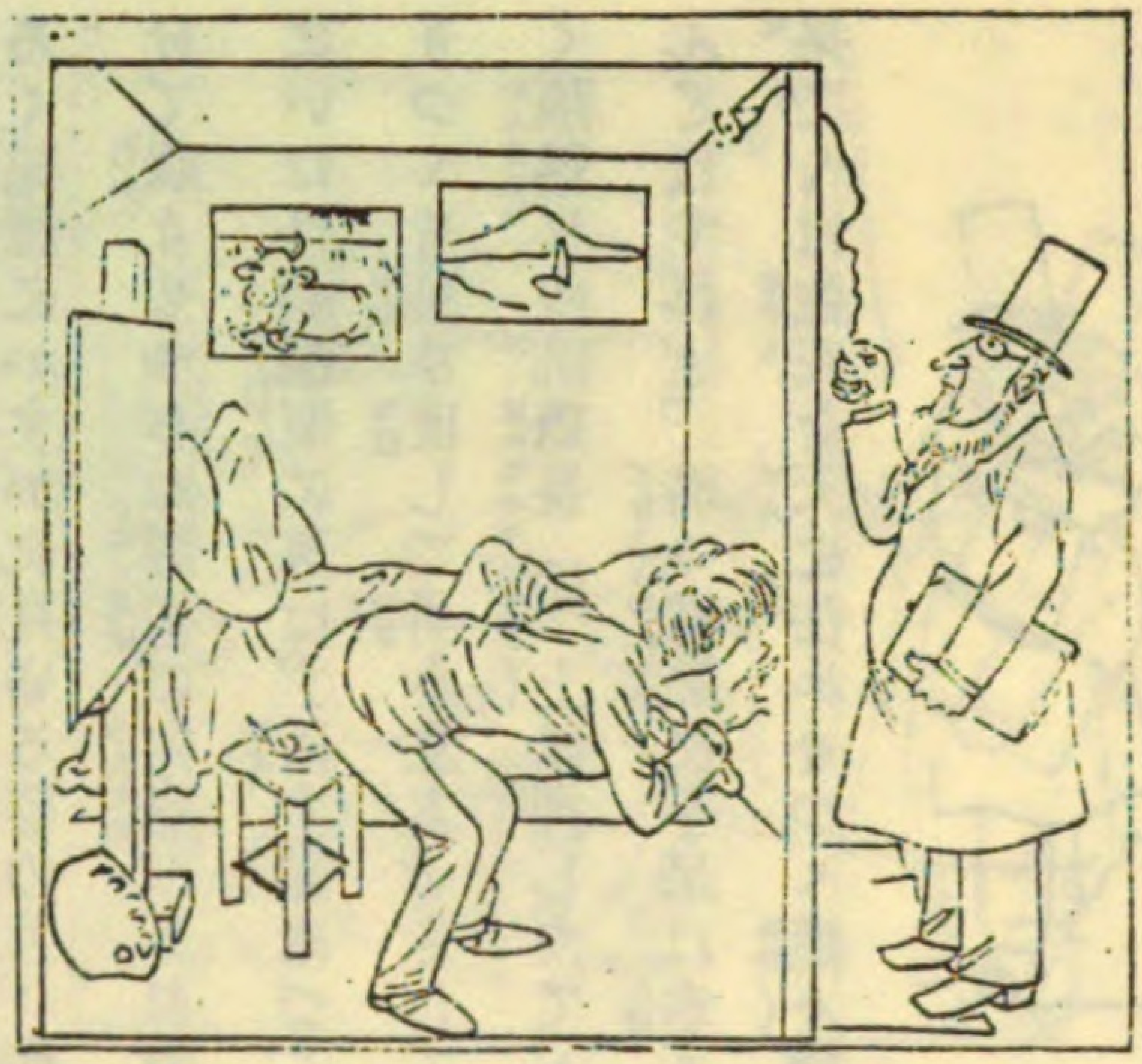
筑峰女史

砲煙彈雨も厭ひなく御國のためと一筋に二ツなき身を擲ちて盡せし甲斐も著るしく一とせあまり東洋に吹きすさみたる戰風もやうやくこゝに治まりて艱難辛苦を功しを我が家つとに喜びて勇みて歸る一兵士。



(一)ア、好い心持だ

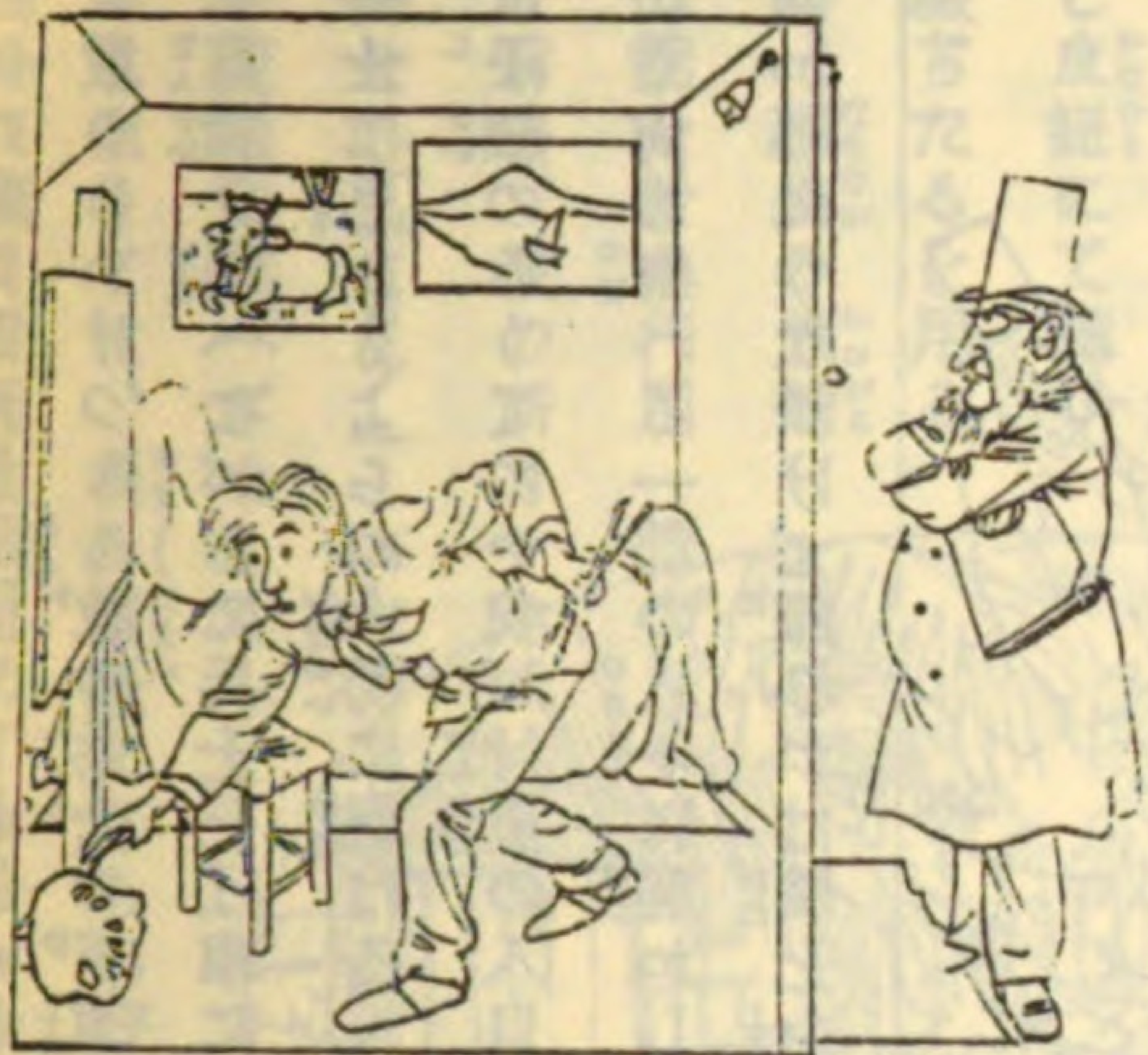
迎ひの爲に四五里程隔てし最寄の停車場に村長初め多人數つめかけつゝも彼の兵士の下車するを見て一せいに萬歲を唱へながらに兵士をば車に乘せて急ぎけり。兵士は思ひもよらぬ大勢に祝はるゝをば恥ぢてにや又は子細のありてにや我が村里の入口に老若男女の區別なく尙も集へる一郡の人々に恥かし氣にもめをくばり何か心にうなづけど誰れかは胸を白眞弓ひくよしもな


（二）ハテ誰だらう

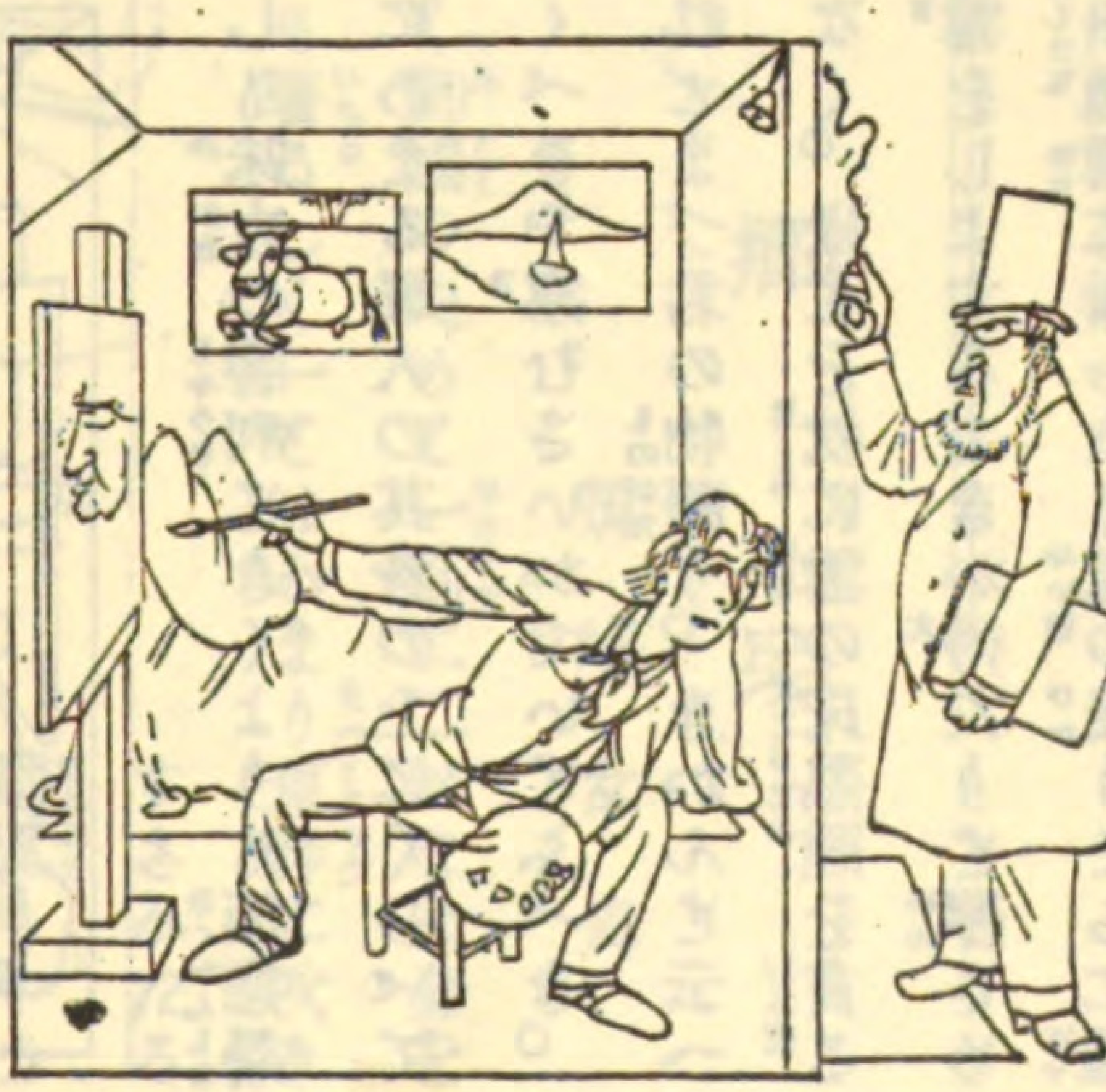
き祝宴に誘ふまに〳〵着にけり。人々盃とり上て君をなぐさむはしもかと心計りのこのうたげもふけし心くみわけつ胸を開きてこの日頃勞れし者をば休めてよ。君か出にし其日より呼聲高き號外にいかゞあらんと案ぜしも味方の勝利ときくよりも極寒暑熱の憂き苦勞想ふにあまる軍人の其身の上にくらべては嚴暑もなどてさくべきや寒むさいかでいとふべき。積りし咄しも數あれどまづ君の物語り。きかんと云へは此方は誇り氣もなく。ほこを枕に雪の床熟睡を貪る一陣の身を切る吹雪をしようするてきか得たりと夢さめて見るめも遠き滿州地雪にきらめく刄の光りそらに轟


（三）こいつア困ッた

ろく砲煙にかすかに見ゆる望の月。影物凄ごく小夜更けて眠りもやらぬ露營の內忍びかねたるふる里の云ふにいはれぬ憾慨に思はず落す露まづく征衣の袖を志ぼりつゝも思ひ直して勇み立ち。さして行へは北京城早く陷落日の御旗長城上に押したてゝ叡慮を休め奉らんとはやれど。時々寒風に手足は氷り彈丸糧食盡き果てゝは生死を天に任かせつゝ追々數ヶ所の激戰を經つゝも命を保ちしはこれ我が產初の加護ならん程なくこゝに凱旋軍に加はゝりて我骨を埋るならんと思ひてし遼東半島あとに見て目出たく歸る日の本の月影清き須磨明石。やがて灘波の浦安く神戶にてそは着しより走る滊車も倘ほ遲き心地して遂に營所に着にしが其翌る日歸鄉を許され斯も皆樣に無事對面なす事は皆。天皇陛下の賜なり大慶感謝の外なしと述ぶるをきゝて皆人のさす盃をうけながら酒宴も半ば過ぎしかば周旋人のすゝめにまかせ我が家にこそは歸りけれ。年老ひたる兩親や兄弟にむかへられてはさすが。また先たつものは淚のみ積る話しに夜をふかし明

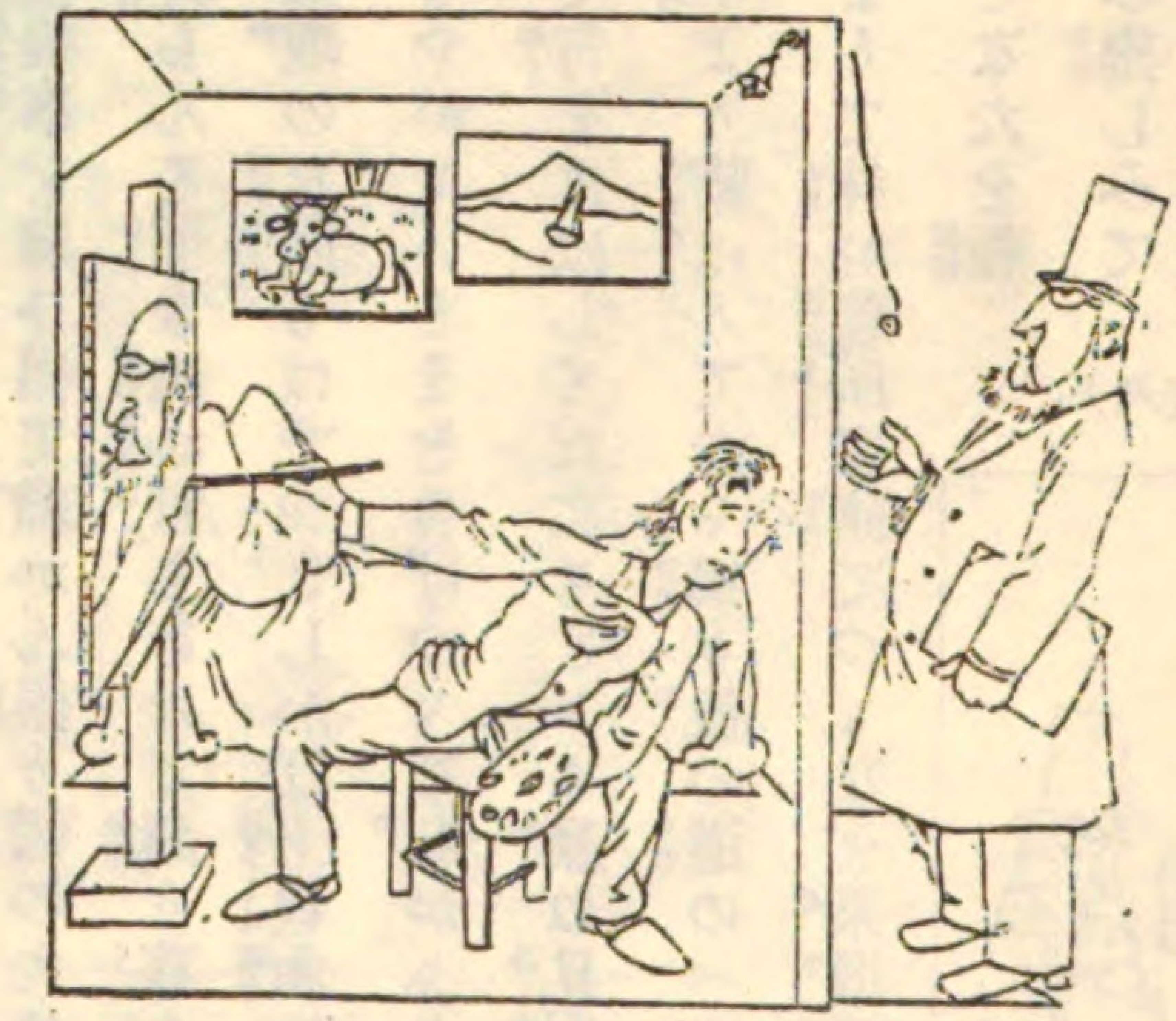


（四）好い考があるゾ



（五）ドリヤ背景た

くれば親友訪ひ來たり打ちあけ話しの其の末にきのふより何か憂うつ心に掛りたる風情の見ゆるは如何にぞととひ掛けられて實にや。思ひ内にあれば色外にあらはるゝとかやこぞの夏。またの逢瀨を神かけて別れにしわき妹子が迎ひの人の其の中にありもやすると見まはりしも影だに見へぬ空蟬のかたき契りもそら言と他家に緣付やしつらんとそれのみ心にかゝりにきと。



（六）此鍵穴から

面ぶせなげにいへければきく友達はらにさもありぬらんされどぜひなき次第かや君が戀にし彼の乙女君出陣の其後は兎角に心地すぐれずありつるが。いぬる卯月の初めつかた風の心地と打ちふしてしめ

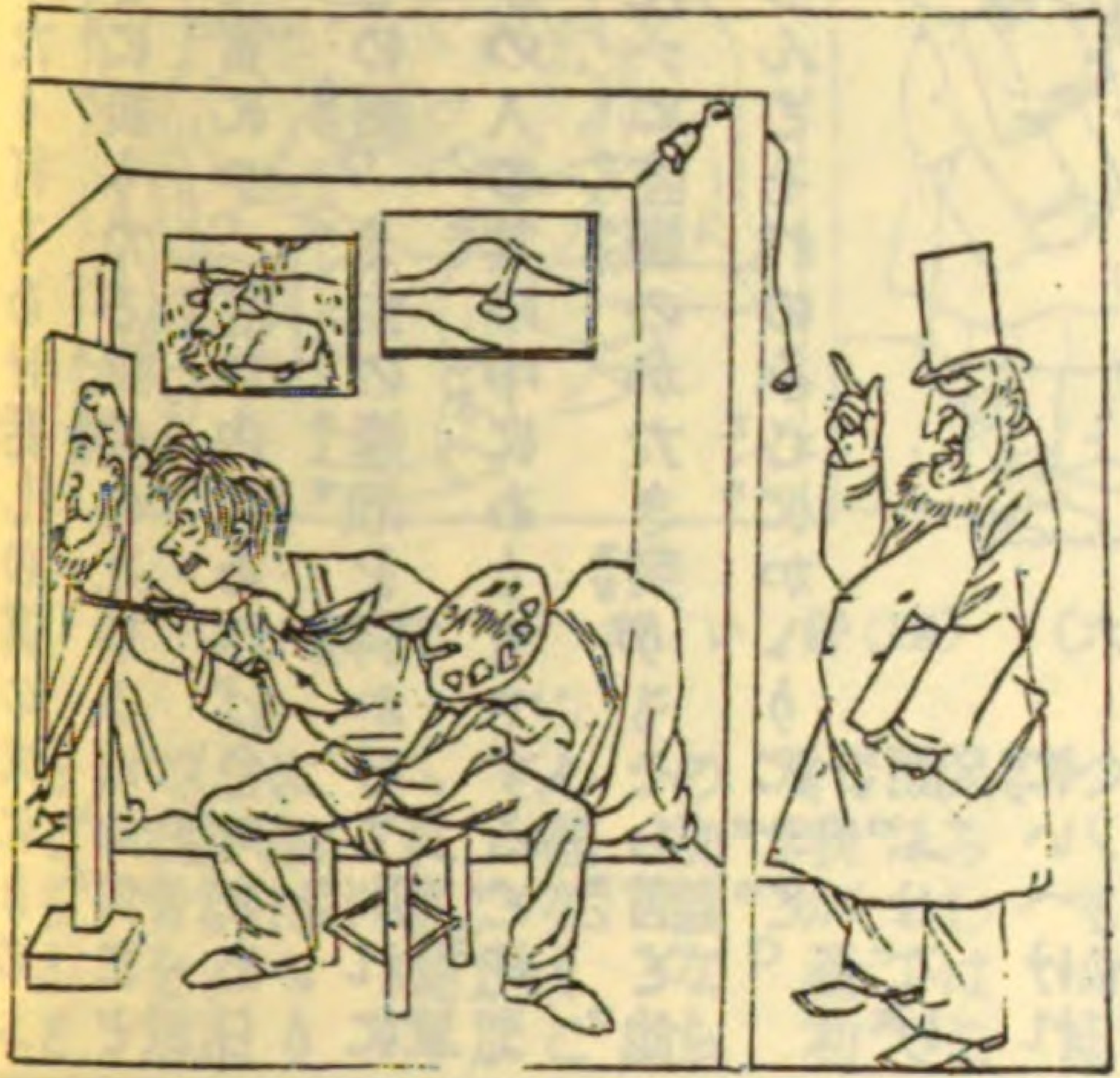
（七）禿頭が出來たぞ



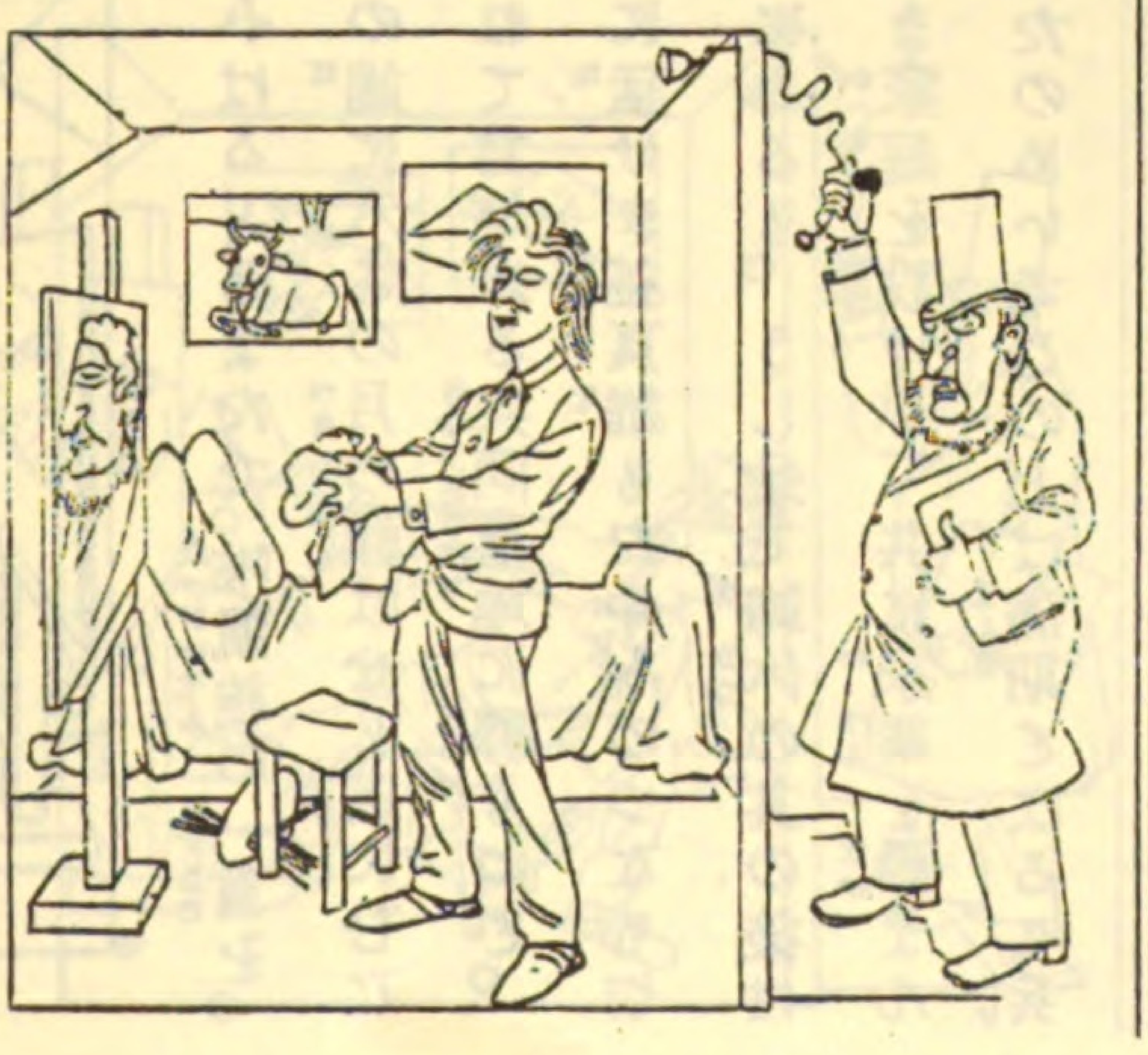
り勝ちなる五月やみはるゝもまたで。唯凱旋の一言を。この世の名殘と山の端に入さの月の顔ばせも遂にむなしくなりしかば兼ねて君が志る共同墓地に葬りぬと。きゝては。さすがに猛けき益良雄もたのみのつなも切れはてゝ最早故郷にあるも。うし兼て歸休の其の後は妹と家居して樂しき家庭を設けつゝ共に家業を勵まんと期せしも今は空たのめいでこの上は滿期となるも兵

役従事を願ひ出て續かん限り國のため盡くして身をば終らんと固き決心打ちあけて語り暮らしつゝいつしかに賜暇の日限もはやつきしかば兩親初め兄弟朋友知人にもやがていとまを告げつゝも我がふる里を後にして出で行を志ばしとだにもとゝめ兼ね見送る人々を強て途中より斷はりてたゞ獨り彼の道のべの共同墓地に立ちよりて妹が墓所に詣てつゝなど果敢なくはなりつるぞそなたを賴み樂しみて此の年月を送りしに先だつ事のうたてさよと人目無ければ木碑によりそひて暫らくは去り得ざりける嗚呼我れながら不覺なりいで君國の爲めにこそ此の一身を捧げんと深き思ひに沈みつゝ進まぬ足を急がせて行くなる人の心の中。知るものとては彼の墓地の新佛より外には絶えてなかりける。たゞ彼の兵士が道すがら口吟みたる和歌二三首あり。戀人にわかれて猛き武士のこゝろのたゆも打折れにけり。思ひをく事しなければ今よりは君國のため身をはすてなむ。たのみてしきつなも絶えて武士のこころのみたれぬ妹もなし。

（八）ちつさ毛なはやさう



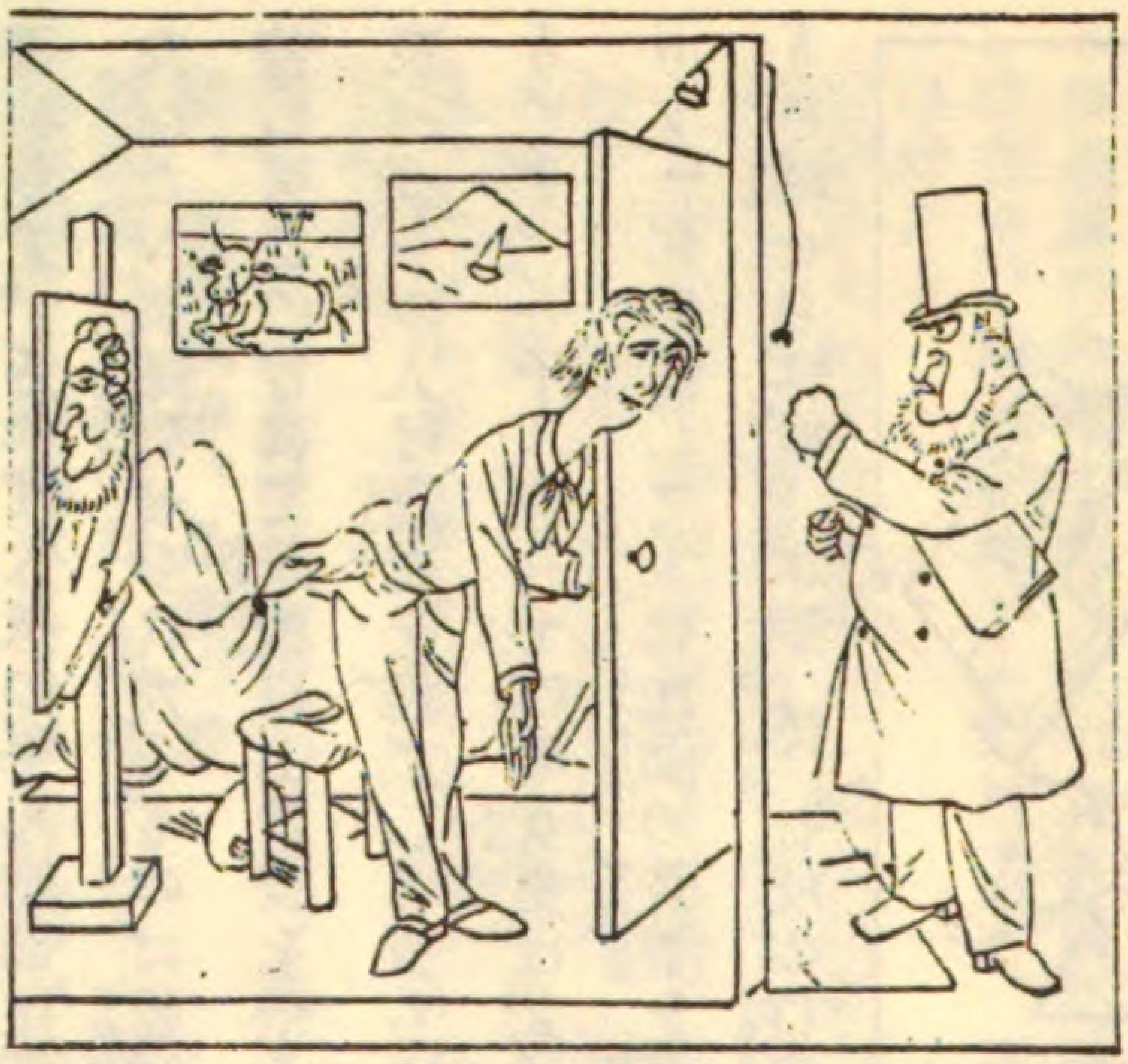
（九）ア、出來たゝゝ



## 「會議」（口繪のゑとき）

米齋生

メリー、バシカアトセッフ女史は千八百六十年十一月十一日を以て露國に生まる幼少の時父母の離別するにより女史は母に從ふて母の生家に往き次て歐洲各國に歷遊せり、漸く長して才智衆に勝れ、先輩の人をして屢ゝ喫驚せしめたり。その博識精通なる英、佛、伊、獨、希、羅の古今語學はいふに及ばず各種の文學科學圖畫音樂一として學ばざるはなく學で通ぜざるはなかりしといふ。十七歲の時唱歌者にならんとせしも病の爲に果さず、終に畫家を志して巴里に畫伯の聞え高きヂユリアンの門に入りぬ、女史の天才と勉强とは入門後漸く十一ヶ月にして早く既に繪畫共進會の賞牌を得るに至りたり。女史の技術は年と與に進み其畫は屢々「サロン」に陳列せられぬ。（佛國巴里に每年開かるゝ美術展覽會あり。「サロン」といふ。この會に出品せんとするには大家名家の嚴密なる鑑査を經ざる



（十）ごうもおまちさほさま



（十一）ごうぞ入らつしやい

可からず、されば大抵の平凡繪畵は皆落第す、因て一たびこゝに陳列せられたるものは畵家の榮譽とせり。若し又この會にて銀牌以上の賞を得ること二回以上に及べばその人は鑑査を經ずして直ちに出品せらるゝなりとぞ）一千八百八十四年女史は「會議」なる畵を「サロン」に出品して大に江湖の賞贊を博し當代の名畵なりと稱せられぬ。本號挿む所の口畵はおもかげを寫したる者なり。この小見等が一條の繩を如何なる遊に供せんかと相談するを「會議」てふ大袈裟なる題目を附す、其落想既に凡ならず、而して其筆力賦彩の卓絶秀抜なる有髯男子もまた慚べきのものあり。左方の垣に白墨もて絞臺に上れる人の形を畵きたるものは、一日女史の知己の童女窃かに來りて樂書したるを女史見て深く其天眞の流露せるを愛しそのまゝになし置きたるなりといふこれ又一佳話ならずや。



（十二）大きにありがたう

女史はこの畵を名殘として同年十月肺を病み遂に不歸の客となりぬ時に年僅に二十四。後幾くもなく其名作數種は佛國政府の購ふ所となり、又其目錄二卷は梓に上せれて一時歐米の讀書社會を聳動せり。

女史が芳魂は再びまた歸すべからずと雖も其畵其日記は長へに女史が名を傳へて餘りあり。

◎新ぎんなん　目下新ぎんなんのさかりなり、「たきよせ」を製せんとならば銀杏實を生にて皮をさり澁皮は湯につけて取りふきんにて水氣をさり爼板の上におき庖刀のむれにて叩き饂飩粉をつなぎに少し入れ水を加へまぜ程よく取り胡麻油にて揚げ煮物につかふべし、椀盛茶碗むし、寄鍋などの種につかひてよし

# 時事一斑

## 團子坂の菊細工

今廿五日より開場する本郷團子坂の菊細工は左の如し有名なる植物の大舞臺は臺灣征討の近衛師團長北白川宮殿下せり出しの場にて舞臺廻れば威海衛水雷艇攻擊定遠轟沈の場を始めとし外に文覺上人、明烏雪責の場、菊花壇、鉢菊、一幹百輪咲、諸盆栽陳列

植梅の大舞臺は仙臺萩御殿場にて、是は過般の歌舞妓座興行の通り廻て石川五右衛門釜入の場外に夏祭泥仕合、滑稽鯛椀、小野口工兵、菊花壇、鉢菊等の飾付あり

新粉の大舞臺は旅順口二龍山砲臺占領之場、土城子淺川騎兵大尉奮勇の場廻て辨天小僧のゆすり場、外に五條大橋牛若辨慶立廻りの場、娘道成寺

植重の大舞臺は國性爺紅流の場、廻て日向島景清親子對面の場、外に玄武門の原田重吉、仲の町鞘當の場、樋口大尉小兒を抱て奮闘する場、菊花壇、盆栽菊の陳列

植安の大舞臺は馬關談判の場、鈴ヶ森權八長兵衛の場、臺灣戰爭、孔雀の遊

薔薇園は昨年の如く陶器ひねり人形の日清戰爭大箱庭數個なり其他大なるは九尺四方のものあり中には紫檀製箱庭もありて臺灣、旅順を始め遼東半島、澎湖島、朝鮮等各所の戰地實況を實地地圖に依て寫して見せるといふ

## 橋本左內氏の書簡

去六日實弟橋本綱常氏施主となり兩國回向院にて三十七回忌執行、氏の遺墨數種あり內に氏が北堂へ送りし書簡も多くありき亦たその一二を謄寫すれば

はゝ上さま　左内

御いわゐのふみ

こん日はおいく／＼人だち御ざ候ゆへふみながく／＼さしたゝめかね申候なを御はるながのせつさ申おさめ候かし

初春のこさぶきかぎりなくめでたくぞんじ申おさめ申あげ候まづ／＼みな／＼さま御きげんよく御わかざし御むかゑあそばしまこさに御めでたき御こさ御いわゐ申あげ奉り候つぎにこのおもてわたくしならびにつなさなさぶ郎さもぶじそくさいにてさしなむかへまうし候まゝはゞかりさまながらくれ／＼すこしも御あんじくだされまじくぞんじ奉り候まづははつはるの御しうぎまうしあげたくあら／＼めでたくかし

正月三日志たゝめ

かへす／＼じぶんがらなをさむさつよくおわしまし候まゝせっかく御いさひおからだ御だいじにあそばし候やうかず／＼いのりおり候このたびたよりにすゑひろ五ついしよかんぶくろ七そくかつをぶし一ほんはつはるの御いわひ申あげ候しるしまでに御めもじにかけ申あげ候いくひさしく御いわひおさめくださるやうれがひもうしあげ候このたびわなにもやうじの御ざなく候まゝまたつぎのたよりにく

わしく申あぐべく候すゑひろはたくまにも御つかはしくだされ候やうれがい奉り候いくたたかはたけさむへもれんさうの御しうぎおついでによろしく御申くだされ候やうれがひ申あげ候めでたく〳〵

＊　＊　＊　＊　＊

このあいだわ御いわゐのまめ御おくりくだされありがたくぞんじ奉り候さつそくつなさぶ郎にもつかわし申候きさうだもおり〳〵たづれくれ申候このたびかゑり申候あいだよろしく御もうしくだされかし〳〵

廿一日　　左　内

はゝ上様　やごやうど

## 月光に映する虹

本月二日暴風に徹雨を交へ降り又晴れ定めなき天候にて黄昏後滿月暗雲を破つて中天に懸る際西天に一條の虹現れ暫時にして消え其狀紫、樺迄は明瞭に見え他は灰白色を呈するのみ、日光水蒸氣を射て虹を現すは通常なれども月光に虹を現はすは學理上敢て不思儀とせざるも甚だ奇異の思ひあり

## 富士の初雪

三日朝富士山上初雪の積れるを見る之を平年に比するに一日遲く又昨年に比すれば十一日遲し今明治十七年以來沼津測候所より富士山の積雪を認めたる初日を列記すれば左の如し

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十七年 | 十月六日 | 十八年 | 九月廿七日 | 十九年 | 十月七日 |
| 二十年 | 十月二日 | 廿一年 | 十月一日 | 廿二年 | 九月廿五日 |
| 廿三年 | 十月四日 | 廿四年 | 十月十二日 | 廿五年 | 九月廿五日 |
| 廿六年 | 十月七日 | 廿七年 | 九月廿二日 | 廿八年 | 十月三日 |

## 社告

### 歌苑

次號より『歌苑』の一欄を設け三十一文字及新躰歌（最も短篇を可とす）を汎く江湖に募る